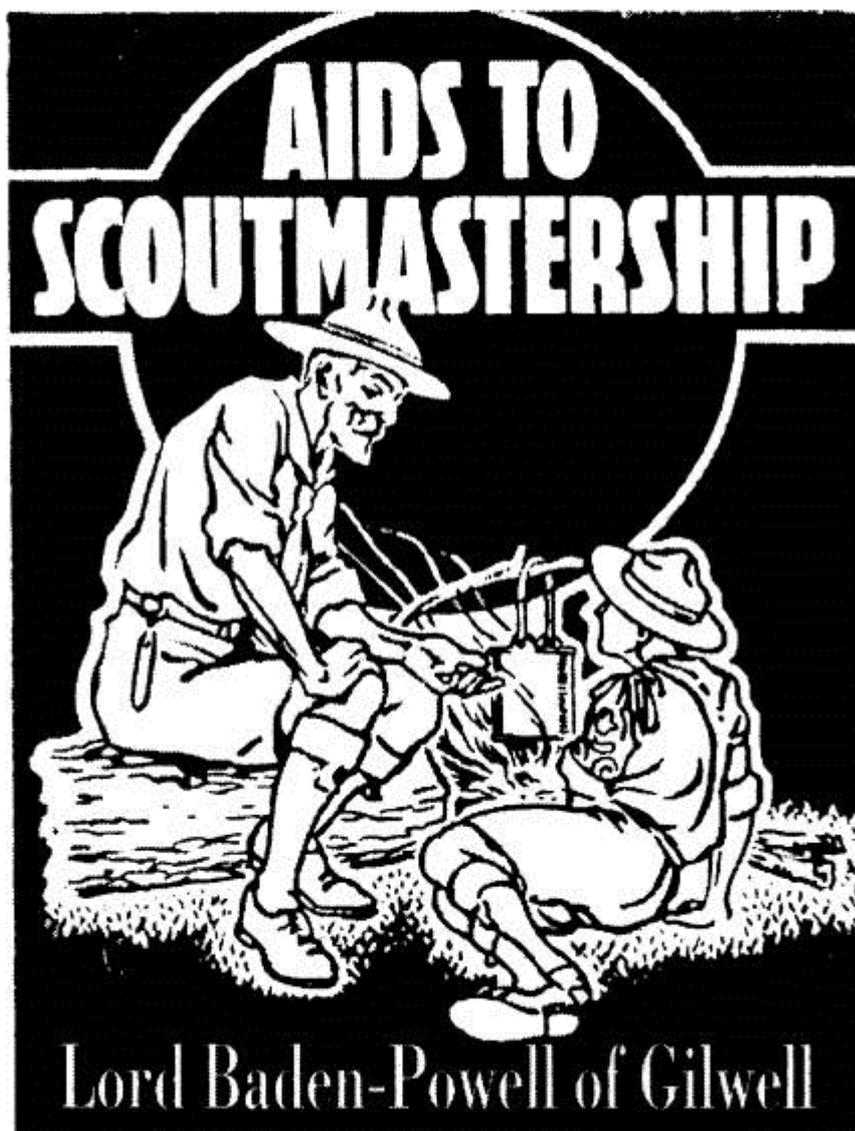


ベーデン-パウエル著
ボーイスカウト 日本連盟訳

隊長の手引



ボーイスカウト日本連盟

AIDS TO SCOUTMASTERSHIP
隊長の手引き ベーデン・パウエル著(国際版)

ボーイスカウト日本連盟訳

目次

第Ⅰ部

少年をいかに訓練するか

隊長

その資格

その任務

スカウト運動に対する忠誠

隊長の報酬

少年

その特質

環境と誘惑

隊の本拠とキャンプ

少年たちをつかむには

スカウティング

スカウティングは簡単である

スカウティングの目的

スカウト訓練の四部門

スカウティングの諸活動

スカウト精神

班制

班長会議—名誉会議

班制の価値

スカウトのユニフォーム

隊長の担任

第Ⅱ部

社会人性を育てるスカウティング

1. 人格(性格)

人格(性格)の重要性

なぜ一隊 32 名を超えてはならぬか

騎士道とフェア・プレイ

紀律訓練

名誉の感覚

自立心

人生を楽しむこと

識見の発展—敬虔

自尊

忠誠

II. 健康と力

健康の重要性

強健であれ！

編成されたゲーム

体操

教練

戸外

キャンプ生活

水泳・漕艇・信号

個人衛生

清潔

食物

節制

制慾

喫煙しないこと

身体不自由児スカウト

III. 工作と熟練

工作と道楽

まず開拓作業

技能章

知識

自己表現

道楽仕事から始まって一生の仕事へ

隊長の担任

職業

IV. 他人への奉仕

自分本位

自分本位を根絶して善行の習慣を

地域社会への奉仕

将来にあがる成果

総括のことば

付録

日本語版刊行について

ボーイスカウトの指導者、特に隊長の必読すべき本は他にもあるが、本書はそれらの中でも第一に読まねばならない本である。

著者(B-P)のこぼや、英国のロウオーラン総長の序文、そしてウイルソン先生の国際版に対する解明的な緒言によって読者は、この本の来歴を読みとれるだろうと思うが、私は更に、それに加筆する義務を感じる。それは、わが日本に於ける本書の来歴についての説明である。

原書の初版は、1920年(大正9年)に出された。この年こそは第1回ジャンボリーがロンドンで行なわれその場でB-Pが世界のチーフ・スカウトに推され、そして国際事務局が誕生した年であるから、その出版には大きな足跡が響く。1922年(大正11年)4月13日、元の日本連盟が結成され、1924年(大正13年)デンマークでの第2回世界ジャンボリーに初めて日本が正式に参加した時に、およそスカウティングの基本になるような原書は沢山日本に持ち帰られたが、本書の原典もその中であつたこと勿論である。それは四六判で127ページある、いわゆる原典(旧版)である。

翌1925年(大正14年)この派遣団で帰って来た者のなかの有志者が、外務省のある人々の協力を得て翻訳し、旧日本連盟から「少年団指導者教範」と銘うって刊行されたのである。然しこれは残念ながら絶版になり、秘蔵していた人の大多数は空襲で焼いたりして今日では稀にしか発見されないのである。

然し、大切なスカウトの文献が戦火で焼かれたのは独り日本だけのことではなかつた。ヨーロッパ諸国においても御同様であつた。そこで大戦後、アメリカのスカウト本部の手によって再刊が始められた。本書(国際版)もそれによって刊行された本の中の一部である。

この国際友愛版は、A5判で総ページ71頁である。

この国際友愛版を原典と比較すると56頁も薄い目次を一覧すると内容の組み替えに気づく。そこで、これは原典のエッセンスだけをとった抄本ではあるまいか、という錯覚が生じる。然し、ウイルソン先生の諸音を読むと、1920年の初版はその後B-Pとウイルソン先生の手によって何回改作され、次いで米国の、ヒルコート氏も一枚加つて改訂されたことがわかる。即ち、最初は英国だけの教育状態を対象として筆をとったのだが、その後、英国の教育界も年と共に改善されたため原典のある部分は削らねばならなくなったこと、一方、スカウティングが他の国々にゆき渡つて国際的なスケールに発展してきたので、それに即応すべく書直ししたり、アレンジする必要を生じたこと、などの理由で本書の内容が成長して、文字通り国際版になったのだと知る次第である。

戦後、再建した日本連盟は、焼けたり、絶版になつたり、改版になつたりした基本的なスカウト文献を、再刊しなければならないのだが、これは相当な大事業で中々急速にはできない。そこでとりあえず、“Aids to Scoutmastership”のこの国際版を邦訳することにした。一応できたが、これを単行本として刊行するだけの余裕がなかつた。そこで日連発行の雑誌「スカウター」(後、スカウティングと改題)の巻末にこれを何回かに分けて載せることにした。即ち、1954年の2月号、4月号、6月号、10月号、1955年1月号(これは1954年の12月号を兼ねた号)そして6月号—以上6回に分けて載せ、その部分だけを読者が取り集めて1冊に綴れるようにページをつけたのである。この企画と邦訳に対しては当時の指導局の関忠志氏に負うところすこぶる大であつたことを記しておきたい。

今年すなわち1957年(昭和32年)、我々は創始者であり本書の著者であるB-Pの生誕100年、且つはこの運動発足50年の記念すべき年を迎えるにあつて、祝賀並びに感謝の意味で、失われたスカウト文献の基本的なものを再刊するという決意をし、先ずその第一着手として、先に分載されたこの、“Aids to Scoutmastership”の邦訳を単行本として刊行することとしたのである。邦語版は「隊長の手びき」と名づけられた。

上が日本に於ける、この本の成長過程である。

読者諸君、この本は誠にささやかな一冊の本ではあるが、今より37年前にB-Pによって生まれて以来、各国の沢山の同志の、有形無形の協力と育成によって、この本そのものが、スカウティングの成長と併行して成長して今、読者各位の手に渡されたものである。

この意味でも文字通り国際版なのである。私は、この本の成長とほぼ同じ年月を、この本と共に歩み来ったスカウトの一人として、感慨まことに深いものがある。

今回、名前は「指導者教範」ではなくて、「隊長の手引」という名で再刊されたが、私は再刊にあたって、記者と、刊行に特別な御世話を頂いた久留島理事長、および一ツ橋書房に対し深甚なる謝意を表して筆をおきたい。 彌栄

昭和32年3月

ボーイスカウト日本連盟

総長 三島通陽

序 文

“Aids to Scoutmastership” (隊長の手引)、簡単な表題、しかしこの本は何と驚くばかりに完全なことか。国際事務局で我々は、スカウターが足りないとか、我々が解決しようとするその他の問題とか、今日の情勢から生まれてくる各種の新しい問題を受けとる。

そのどれもが新しい問題ではなく、この本を幾度も読み返してみると、ちょうど我々が探していた答が出ている。我々はあまりにも文献や指導書を持ちすぎている、私はよくこう思う！この本と“Scouting for Boys”の中に我々の必要なものは何でもある。その他のことは、B-Pの青葉で言えば、“隊長の常識に任せば”よろしい。

この本を読み、また読み返して頂きたい。それが、諸君の経験がどんなに長かろうと、今までどれだけ成功していようと、諸君が前よりよい仕事をするための助けになると私は確信する。

(英国) 総 長

ロウオーラン

著 者 の こ と ば

この本の長さを気にしないで頂きたい。

スカウティングは深遠難解な科学ではなく、間違いなく理解すればむしろ楽しいゲームなのである。同時にこれは教育であり、Mercy—あわれみ—と同じようにそれを受けるものとひとしく与えるものにも役立つことが多い。(記者註・Mercy うんぬんの言葉は、16世紀イギリスの劇作家シェイクスピアの“ベニスの商人”の中で、裁判官が述べる有名なせりふの引用)

”スカウティング“という言葉は、ゲームによって少年あるいは少女のために公民教育をする一つの方式、という意味をもつようになっている。

少女は大切な人たちである、何故なら、一国の母親たちがよい公民であり、品性ある婦人であれば、その息子たちをもそういう点で欠陥がないように注意するであろうから。現在の状態では、スカウト訓練は男女両方に必要であるから、それをボーイスカウト運動、ガールガイド運動として両方に与えている。根本の主旨は大方同じである。違うのは細部においてだけである。

A・S・M・ハッチンスンはその小説の中の一つに、青少年が必要とするものは背景であるとのめかしている。さて我々

は、スカウティングとガイディングにおいて彼らに一つの背景を与えているが、それは神がすべての者のために備えて下さった背景——野外と幸福と人の役に立つ、これである。

実際、隊長は少年をこの背景へと案内して行くうちに、その同じ幸福さと人に役立つことの分け前にはからずも自分もあずかるのである。隊長はこの仕事を始めた時に恐らく予期したよりも、もっと大きな仕事をしていることに気がつくが、それは彼が人間と神に対して生命をかけるに値する奉仕をしていることがわかるからである。

諸君がこの本の中に、知識を完ぺきにするような一揃いのはっきりした手段を見出したいと思うなら、これは案外な本だと思っだろう。

私はただ、我々に成功するとわかった方法とその理由を示唆として述べようというのである。

ひとはその目的を理解すると一層専心して示唆の数々を実行するものである。それで、この本の大部分はいろいろの手段の詳細というよりも、その手段のための目的として取り上げてほしい。これら手段は読む人の器用さに応じ、またその人の働いている地方の事情に応じて充足されてよいのである。

国際語版に対する緒言

第一次世界大戦の少し前、ベーデン・パウエルは隊長の養成講習を計画し指導した。そのため彼はスカウティングによる少年訓練に関して、一連の覚え書を書いた。戦後、それをまとめて出版したらという提案がなされた。彼は、その後の経験に照らして校訂し、——いろいろの面において戦争はスカウト訓練にとって一つの試金石であったので 1920 年に“Aids to Scoutmastership”が出版された。

その同じ年、ロンドンで最初の世界ジャンボリーが開かれ、スカウトの世界団体(国際事務局)が発足し促進されることになった。そのジャンボリーでベーデン・パウエルは、彼が授けられた他の何物よりも尊重した榮譽の称号“世界の総長”という名をもって歡呼されたのであった。

その後十年して“Aids to Scoutmastership”の改訂版が発行された。この改訂版を出す手伝いをする事ができたのは私の特別の喜びであった。“ギルウエル・パークのキャンプ・チーフ”として、隊長訓練の実際に照らしてこの本に書かれている示唆や教示を実行したりするのは、私の義務でもあり喜びでもあったから、総長は私に協力を依頼されたのである。総長とギルウエル・パークとの間に近い連環がまた一つ加えられたのであった。スカウト運動が成年に達した 1929 年の年の第三回世界ジャンボリーにおいて、大英帝国の爵位が総長に授けられた。ボーイスカウト国際理事会のすすめにより、「ギルウエルのベーデン・パウエル卿」と称号することにしたが、それはギルウエルパークがスカウトの国際訓練場として認められており、また国際理事会の人々と同じく総長自身も、スカウトの世界団体が王室に認められたということを強調したいと考えたからである。

この本の両方の版の主要部分は、公民を作り上げる資質を解明した、総長自身の手になる図表と、それを教えるスカウティングの実際にもとづいている。これは彼の習慣であるが、ベーデン・パウエルはできる限りわかりやすいものにしようと、自分の草稿を検討し直し続けた。この絶えざる検討の結果の一つはスカウトの訓練計画を解明した非常に簡素化された図表で、これを彼は自叙伝“Lessons from the 'Varsity of Life” (人生大学から学んだもの)のなかに入れている。

“Aids to Scoutmastership”の国際版は、この最後の解明に従ったものである。前に出た版の内容をそれに準じながらも少しばかり配列し直し、多少のあき間をベーデン・パウエルの他の書きものから取って補充した。国内だけのものから世界の用途にまで引上げる——というこの新しい版の目的を考え、イギリスの教育活動に関して、1920 年代には行なわれたが今はもはや話題にも上らず適切でもなくなった参考文献は取り除いた。この本の編集にはアメリカ連盟

の出版編集部職員ウィリアム・ヒルコートが当った。ヒルコートはそのスカウティングの経歴においてB-Pの足跡に黙々として誇りをもって従って来た人である。

この国際版の出版を許し励まして下さったレディー・バーデンパウエルには特に感謝の言葉を捧げるべきである。

私自身が固く信ずるところは、世界各国におけるスカウティングは、大人の監督をできる限り少なくして、少年が自分自身を伸ばして行けるようにしてやる”ゲームとしてのスカウティングの単純な本来の意義に立ち返るべきだということである。その少年の指導者という高い地位をみずから選んだ我々が、もし日常の生活においても、スカウト活動においても“少年を忘れるな”という方向に向って進むならば、我々は一層よい働きをし、一層よい結果や築くことができるだろう。“Aids to Scoutmastership”のこの版は、この信念をもって作られた。これが創始者が描いたままの真のスカウティング精神を生かし続けるために役立つようにと願っている。またこれが我々の目的と方法を理解するため、全世界の隊長たらへの助けとなるようにと望むものである。

ボーイ・スカウト国際事務局

名 誉 事 務 局 長

J. S. ウイルソン

第1部

少年をいかに訓練するか

隊長

少年

スカウティング

隊長は兄の心を持って少年をみちびく

隊長

隊長になろうとする人たちに気安く感じてもらうための前おきの言葉として、よい隊長となるには“驚嘆すべきクライトン”——物知り博士——でなければならないという世間一般の間違った考え方に私は反対しておきたい。そんな必要は全然ない。(記者註・クライトンはジェームズ・クライトン、1560年に生まれ85年に歿するまでスコットランドの物知り天才といわれた人。驚嘆すべきクライトンと通称された)。

ただボーイ・マン(童心の大人)でありさえすればよいのだ、ということは——

- (1) 自分の中に少年の心を持たなければならない。その第一歩として少年たちと一緒にいなければならない。
- (2) 年齢層の違いに従って少年たちの必要とするもの、目ざすもの、希望するものが何であるかを理解しなければならない。
- (3) 少年たちを、集団としてではなく、個々の人間として取扱わなければならない。
- (4) その上で、最良の成果を得るために、個々の少年たちの間に団結の精神を育ててやらなければならない。

第一の点についていうと、隊長は学校の教師でも、司令官でもなく、牧師や講師でもない。必要なことといえば、野外活動を楽しんだり、少年たちの野望の中に自分もとけこんだり、また信号や図画であろうと自然研究や開拓探検であろうと、少年たちが希望するものを、教えてやってくれる人たちを見つけて来たりする、こういう能力がありさえすればよいのである。

少年たちに対して兄の立場に立たなければならない、ということは物事を少年の見方で見ること、そして正しい方向へみちびき、案内し、それに熱意をもたせることである。肉親の兄のように、隊長は家族の(スカウト隊の)伝統をわきまえ、そのためには多分に厳格さが必要だとしても、その伝統が守られるようにしなければならない。これだけでよいのである。スカウト運動は愉快な兄弟仲間であって、スカウティングというゲームによって他の人々のために尽くし、利己心が頭をもたげるのを抑えてゆくのが一層愉快である。

第二の点については、いろいろの本が出ていて青年期の各時期に亘っているからそれに任せる。

第三は隊長の仕事——実に面白い仕事であるが——これが少年一人一人について彼の中にあるものを見出し、その良い所を捉えて悪い所がなくなるまで伸ばしてやることである。最も悪い人間といわれる者の中にも5パーセントは良い所がある。それを見つけて出し、それを80パーセントにも90パーセントにも大きくしてやることこそ、スカウティングの妙味である。これは少年の心に何かを教えこむことではなく、その心の中から描き出してやること、すなわち教育である

第四。スカウト訓練において、班あるいは仲間を組むやり方は各個人の得た訓練を一体のものとして表わすことになるもので、それは少年が教えられていたものすべてを実行に移させることなのである。

班制はまた、それが正しく運用されれば、人間訓練という大きな価値を持つものである。それは少年各自が自分の班のために何らか一隊員としての責任を持っているのだということ、一人一人にわからせるようにする。それはまた、各班がその隊に対して一定の責任を持っていることをわからせることになるのである。この班制によって隊長はスカウトたちの道

徳上の見方についての自分の教えや考えを隊員に伝達することができる。これによって、スカウトたちは自分たちが隊のすることについて重要な発言権を持つことを徐々に覚えていく。班制こそ隊を成すものであり、それならば、すべてスカウティングは一つの真の共同制作をするものだといえるのである。

隊長の任務

少年を訓練することの成功不成功は、隊長本人がみずから示す手本によりことが多い。少年の兄になるのと同じくその英雄になることも容易である。我々は、大人になってしまうと、少年がどんなに大きな英雄崇拜の心を持つものかを忘れやすい。

少年たちにとって一つの英雄である隊長は、彼らの成長に対して強力なテコを持っているけれど、同時に大きな責任が自分にかかっているのである。少年たちは、それが美德であろうと、悪徳であろうと、隊長のごく些細な特徴をすばやく見つける。隊長のくせは少年たちのくせとなり、彼が示す礼儀正しさ、いら立ち、明るい愉快さあるいは気短なシカメツ面や進んでする自己鍛錬、時として犯す道徳的なあやまち——これをみな少年たちは気づくばかりでなく取り入れるのである。

それ故、少年たちにスカウトのおきてや、おきてに含まれるすべてのことを実行させるには、隊長自身がおきてにのべられてあることを自分の生活のあらゆる細かい点にも注意深く実行しなければならない。ほとんど一言の教える言葉も要さずして少年たちは隊長にならうであろう。

隊長の仕事はゴルフか、大鎌刈りか、蚊ばり釣のようなものである。もし“力を入れて”うまく行かないなら、少なくとも気軽に骨を折らずに一振り(スイング)する程度ではだめだ。そうかといってスイング(記者註・ゴルフの用語でたとえている)しなければならない。ただ立っているだけでは何もならない。前進するか休むか、どちらか一つである。前進しようではないか——微笑をもって。

スカウト運動に対する忠誠

少年たちに対する任務に加えて、スカウト運動全体に対しても義務があることを、隊長に覚えていてもらおう。少年たちをよい公民に作り上げて行こうという我々の目的は、半ばは祖国に寄与するものであって、いいかえれば、国内においてもあるいは平和な時には隣邦諸国を結び合せるような、親和と“ゲームを選ぶ”気持ちを持つ人たちの間の雄々しい頼もしい競争といつてよいのである。

自分自身実行することによって自己犠牲と鍛錬を教える任務を負わされている隊長たちは、些細な個人的感情を超越する必要があるし、また自分一個の考え方はそれより高い全体の方針の前には屈服させるだけの広い心を持たなければならない。隊長たちの任務は、壁を作っている煉瓦のように各自の持場があって自分も少年たちと同じことをしながら、少年たちに“ゲーム”をさせるようにすることである。隊長一人一人は自分に割り当てられた仕事の範囲があって、それをよく挺身すればするほど、スカウトたちは訓練に応じてくれるものである。それであるから、スカウト運動のより高い目的を目標としさえすれば、或は今から十年先の結果をみざしてみさえすれば、自分たちが適当に割り当てられている任務についての現在の細目を了解することができるわけである。

要求されていることを良心的に納得できない人があるなら、その人が男らしくとるべき一つの道は、コミッショナー(記者註・この役名は理事の場合もあり事務局幹部職員の場合もあり加盟国によって違う)なり事務局なりへまっすぐに持つて行くことであり、そこでもし意見が合わなければ仕事をやめることである。目を開いて最初によく検べるべきで、それを後まわしにしては、細かい点が自分に都合悪いことがわかったり、それは職員が悪いからだと不平をいつたりすることにあるから、公明であり得ない。

幸いにも我々の運動では、地方分権と地方当局に自由を許していることによって、多くの他の団体では不平不満の原因になっている煩わしい形式や手続を少なくしている。

また我々が、この運動全体に対する見方や忠誠において広い心を持つ隊長たちを擁しているのも実に幸いなことである。

隊長の報酬

ある人が私に向かってわざわざ、自今は世界で最も幸福な人間だといったことがある。私は、その人よりもっと幸福な人間——私自身のことを、その人に話してやらざるを得なかった。

諸君は、この我々の二人のどちらにもこの幸福を得るために戦わなければならないような困難は何一つなかったのだ、などと想像してはいけない。まるっきりその反対なのだ。

それは困難に立ち向ったという満足感、そして、それをうまく克服しおおせた喜び、より完全にしてくれるような苦痛に耐えて来たという満足感、そんな幸福なのである。

諸君の一生がばらの花の床であるようにと望んではいけない。もしそんな一生であったとしたら面白くはあるまい。

であるから、スカウトを扱って行くうちには、必ず失望やつまづきに出あうものと覚悟しなければならない。忍耐強くあれ——酒やその他の悪徳のためよりも忍耐の足りないために仕事や職業をだいなしにする人の方がずっと多いのである。腹の立つような批判や煩わしい取組みをある程度まで辛抱強く堪えなければならないだろうけど、報いはやがて来る。

克己という徳を払って自分の任務を尽し、かつ少年たちに生涯を通じて他と違う資格を持たせるような人格(性格)を養ってやることから得られる満足感は、到底文字に書き表すことのできない報酬をもたらしているのである。もし放っておけばやがて青少年を蝕んでしまう害悪がはびころうとするのを防ぐために尽すということは、どんなに地位は低くとも、とにかく祖国のために何か貢献したという充実した楽しさを与えるものである。

隊長もコミッショナーも、委員や技術教師や育成会員また事務担当者も——“スカウター”という言葉で言い表せる人たちであるが、みなこの精神をもってボーイスカウト運動にたずさわっているのである。

この団体に対する信望もスカウト運動の発展も、こういう自発的に無報酬で働く人たちのお蔭である。ここに、よし語らずとも、多くの国々のうちに潜む立派な愛国精神の歴然たる証拠があるのである。これらの人たちは自分たちのしていることに対する報酬も賞讃も求めず、少年たちの訓練を組織だてる仕事のために自分の時間や労力や、多くの場合金銭までも投げ出している。祖国と人類に対する愛のためにそうするのである。

少年

スカウトの家族は——カブとスカウトと年長スカウト

自分の隊の少年を上手に訓練するための第一歩は、一般の少年というものについて先ず知り、次に隊の少年についてよく知ることである。ロンドンの倫理学協会の講演で、サリービー博士が次のように述べたことがある——”よい教師であるためには、子供というものの性質について、知識をもつことが第一必要条件である。少年や少女は、男や女の縮少版でもなければ、教師が物を書くための白紙でもない。子供たちは誰でも特有の好奇心を持ち、未熟で、その上うまく助け励ましてやり、形づくり、或は形を直し、更に抑えもしてやらなければならない不思議な心を持っている。

諸君が少年であった時、どんな考え方をしていたか、できるだけ思い出してみるのはいいことで、そうすれば少年たちの心持や希望することがずっとよく理解できるはずである。

次に掲げる少年というものの特質を、考えに入れておく必要がある——

ユーモア——少年というものはユーモアにみちているのだということを忘れてはいけない。それは深刻な面ではないか

もしれないが、いつでも冗談を喜ぶものだし、物事のおかしい面にすぐ気がつく。彼らの感じる面白さ、おかしさを、一緒に感じさせれば、少年たちのために働くものは自分の仕事の楽しい明るい面を味わい、監督というより愉快的な仲間ということになれる。

勇氣——普通の少年は一般に相当の胆力、勇氣を具えているものである。後年自尊心がなくなったり、いわゆる“不平家”とつき合うことが多くなったりすればともかく、生まれつきとしては少年は不平を言ったりこぼしたりしないものである。

色付——少年は大い高度の自信を持っている。であるから子供扱いをされたり、あれをこころなど指図されたりするのを嫌う。たとえ大失敗を招くことがあろうと、自分でやってみようとするものであるが、そうした失敗をすることが経験にもなり、自分の人間を作っていくことにもなるのである。

鋭敏——少年は大い針のように鋭敏である。事物を観察し、注意し、それらの意味を推理するというような訓練をするのは容易なわけである。

刺戟を好む——都会の少年は、それが“疾走して行く消防自動車にしろ、近所の人たち二人のけんかにしろ”田舎の子供より町のさわぎに動かされやすい。また変化を求めるために、一つの仕事にせいぜい一カ月か二カ月しか腰がすわらない。

感応しやすいこと——誰か自分に關心を持ってくれるとわかった時、少年たちはその人の導くままに応じ従うもので、少年のこの英雄崇拜が隊長の仕事をややすくさせる大きな力となるのである。

忠誠心——これは限りない希望をかき立てるはずの、少年の性格の特長の一つである。少年たちは友だち同志の間で互に忠誠なのが普通で、これがまた自然に少年に友情を抱かせるのである。これこそ少年にもわかる友人仲間としての義理であり義務である。少年というものは外見は利己的かもしれない。しかし一度むけば他人への助けに喜んでなろうとする気持があるものであるから、スカウト訓練のよい素地だというわけである。

少年が持つこれらいろいろの性質を考慮に入れ、研究するならば、指導者は一人一人の違った傾向に適するような訓練の仕方を見出しやすい。このような研究をすることは訓練の成果をあげるための第一歩である。私はかつて一週間のうち三つの違った場所で三人の少年に会ったが、その少年たちは三人とも、スカウティングの感化を受けるようになるまでは、改心の見込みのない無頼の不良少年だったということであった。この三人のそれぞれの隊長たちは、彼らの悪さの下に潜んでいる良いところを見つけ出し、そこを利用して彼らの特異な気質に適する仕事をさせた——そして今や、それぞれの立派なつとめにはげむ、過去の彼らとは全く生まれかわった、見事ながつりした若者に三人ともなっているのであった。こういう一つの成功を収め得たというだけでも、スカウト隊を組織する甲斐があるというものである。

Teacher's world 誌(“教師の世界”)にカツソン氏が、少年——という性格の複雑な働きを説明して次のように書いている——

”私の経験から判断すると、少年たちは彼等自身の世界——自分たちのために自分たちで作り上げた世界を持っているのだといえる。しかもこの世界へは教師も学課も入りこむことができない。少年の世界はその世界自身の行事と標準、おきて、事件、うわき、世論を持っている。

”学校の先生や両親が何をいおうと、少年は自分たちの世界に対して忠誠をまもる。家庭や教室で教えられたものと全く違っていても、自分たちの世界のおきてに従う。自分たちのおきてを裏ぎるよりは、むしろわかってくれない大人の手によって与えられる苦痛を忍ぶ方を喜ぶのである。

”たとえば、学校の先生のおきては、おとなしいこと、無事であること、行儀よくすることを良しとする。少年たちのおきては、それと全く反対である。それは騒がしいこと、危険をおかすこと、刺戟のあることがお気に入りなのである。

”面白くふざけまわること(Fun)、戦うこと(Fighting)、食べること(Feeding)!(記者註・つまり遊んで、けんかして、

食べること)。この三つのFは少年の世界に欠くことのできない要素である。この三つが基礎である。この三つのものこそ少年たちが熱中してすることで、この三つのものたるや学校の先生とも教科書とも関係がないのである。

”少年王国の世に従えば、一日四時間教室に座っているのは、時間と日光のあわれむべき浪費だというのである。机を買ってくれと父親にせがむ少年を——普通の健康な少年で——見たことのある人があるだろうか。また、外を駆けまわっていた少年が、客間に座らせて下さいと母親に頼むのを、かつて見たことのある人があるだろうか。

”たしかにあるまい。少年は本の虫ではないのである。おすわりをしている動物ではないのである。平和主義者でもなければ“安全第一主義”の信奉者でもなく、本の虫でもなければ哲学者でもない。

”実に全く少年なのである——楽しみと闘志にあふれ、いつも腹をすかせ、いたずらと大騒ぎをやっけて、物事に目をつけ、刺戟を求めまわる、ただの少年である。もしそうでなかったら、その子は異常(アブノーマル)である。

”教師のおきてと少年のおきてを戦わせておこうではないか。今までもそうであったように、これから先も少年の方が勝つだろう。いくらかの少年たちは負けて、その代り奨学金にありつくだろうが、大部分は抵抗をつづけ、国家の最も有能優秀な人物に成長するであろう。

”歴史上の事実をみても、幾千の特許を得た発明家エジソンは“あまり馬鹿すぎて教えられない”という先生の手紙を持たされて家へ帰らされたではなかったか？

”科学的法則の根本をつかったニュートンもダーウインも、学校の先生から馬鹿扱いをされたではないか？

”こういう教室のろくでなしが、後年、有用な秀才となった例は幾百千もあるではないか？これらの実例が、少年たちの能力を伸ばしてやるには我々の現在のやり方ではうまく行かないのだ、ということを証明してはいしないか？

”少年たちをそのあるがままに扱ってやることができるはずではないか？文法や歴史や地理や数学を、少年の世界の必需品となるように改作できるのではないか？我々大人の知恵を少年の言葉にほん訳できるのではないか？

少年は、入隊したらすぐきまスカウティングをはじめたがるのだ、ということを忘れないこと。であるから、はじめに前おきの説明をしすぎて彼の熱意を鈍らせないようにすること。ゲームやスカウティングの実によって少年の要求を満たしてやり、それから徐々に少しずつ基礎の細かいことを注入して行くとい。

”結局、自分たちの正義のおきてと行動と冒険をやりとげて行くことに於いて少年たちは間違っていないのではないか？

”少年は少年だからこそ学ぶ先に行動するのではないか？少年は知的な指導がありもしないのに物事を自分でやっけてしようとする、こ実に驚くべき小さな働き者ではないか？

”もし教師たちが、しばらくの間でも、生徒になり、現在いたずらに歪めよう抑えようとしている少年の生活を学ぶとしたら、もっと大いに要を得るのではなからうか？

”なぜ流れに逆らうのか？川は正しい方向に流れているというのに。

”今こそ我々の役にも立たぬ方法を改め、実際のことと調和するようにすべき時ではないだろうか？“少年は少年らしく”などと嘆き声を出し続ける代りに少年たちの驚くべき精神を喜んでやっけてはいけないだろうか？少年というものの性格が持つ野性的な力を導いて、社会奉仕の道へと喜んで入って行くようにさせる以上に、ほんとうの教師にとって貴い楽しい仕事があるだろうか？

環境と誘惑

はじめにいったように、成功の第一歩は自分の受け持つ少年そのものを知ることであるが、第二歩はその家庭を知ることである。その子がスカウトと一緒にない時には、一体どんな環境にいるのか、それを知れば、その子にどんな感化が与えられればよいか、よく分るはずである。

その少年の両親の同情と支持があれば、またその両親たちがスカウト運動の目的と隊の運営について全幅の関心を持

って協力してくれるようになっていけば、隊長の任務は正しい比重をもって軽くなるわけである。

場合によっては、その少年が家庭から受ける影響に悪いものがある、それを克服しなければならないこともある。更に少年たちには他のいろいろな誘惑があるから、指導者はそれらと戦う準備をしなければならない。しかし、これらについて前もってよく知っていれば、いろいろの誘惑が少年たちに悪い影響を及ぼさないように、指導者は自分の方法に工夫を加えることもできるはずで、このようにして少年たちの性格を最良の方向へと伸ばしてやることのできるのである。

強力な誘惑の一つに映画の影響がある。映画は少年たちにとって、たしかに大きな引力である。それだけにその引力をどうしたら止めることができるかと、絶えず頭をしぼっている人たちがいる。しかし、止めることが全く望ましいことだとしても、それは非常にむずかしいことの一つである。それより、映画を我々の目的のために最も良い結果をもたらすようにいかに利用したらよいか、という方が要を得ている。いかなる困難にも、それを味方につけたり、自分の行く方へ引っぱりこんだりして、対応して行くやり方に従って、我々は映画にはどんな価値があるかを知るように努め、それを少年たちの訓練にかなうように利用すべきである。もし監督が不十分であれば、暗示によって悪のための強力な道具になるに違いない。けれど適正な検閲が保証されるために措置はとられているし、それが継続している。しかし、悪のために力があるものなら良いことのためにも有力なものにすることができるはずだ。今では博物学や自然研究に関するすぐれた映画が製作されて自然界の過程について自分で観察するよりずっとよくわからせてくれるし、たしかに何時間かの授業にはるかにまざっている。歴史も視覚によって教えられる。映画には悲劇や英雄的なものを描いた劇もあるし、純粹に面白おかしく、笑わせる劇もある。それらの多くは、悪いものを非難し嘲笑する方へと持って行っている。子供たちが映画館に興味を持ち、行きたがるのを利用して、この視覚に訴えて教えることで、すばらしく良い効果を持たらすようにできるはずだということは疑う余地がない。映画はまた教育の成果をあげようとしている学校に対しても、今いったような効果を持つのだということ更を覚えておきたい。スカウティングでは映画の利用をこれと同じ程度にはできないけれど、我々の努力の促進剤の一つとして利用することはできる。我々は、少年たちをひきつけるものが他にどんなにあろうとも、スカウティングそのものを少年たちが充分ひきつけられるようなものにしなければならぬ。

少年の喫煙とその健康に及ぼす害、賭けごととそれに関連して生じる不正、飲酒や女の子とのらくら遊びまわる害悪、不潔、その他は、自分の隊員たちの日常の環境を知っている隊長によってのみ矯正され得るのである。

その矯正は禁じたり罰したりすることではできない。それよりも、少年たちを誘惑するものと少なくとも同じくらい魅力がありながら結果から見て良い何物かを代りに使ってすればできる。

少年犯罪は少年の中に自然に芽生えるものではなく、大部分は少年が持っている冒険心、その少年自身の愚かき、しつけの不足、または各人の性質などのどれかによって生じる。

当然のようにうそをつくことも、子供たちの間に見られる非常に一般的な欠陥である。しかも困ったことに、これは世界中に広がっている病気である。文明諸国にもあるけれど、未開の民族の間で特に出会う。真実を語ること、またその結果として人間が頼むに足る人物として高められることは、その人間の人柄ばかりかその国の国柄にも差異をもたらす。であるから、青少年の間に名誉心と真実を語ることの風潮を高めるよう、及ぶ限りのことを尽すのが我々の負うべき義務である。

隊の本拠とキャンプ

悪い環境に対する主な解毒剤はいうまでもなく良い環境を代りに与えることでそれには隊が本拠にしている所とスカウトのキャンプが一番効き目がある。隊の本拠といっても、学校の大きな教室を借りてする一週一回半時間の訓練のことをいっているのではない——少年たちを扱う人たちの計画にもよくあることだが——そうではなくて少年たちが自分たちのものだと思うことのできる湯所、たとえば地下倉であろうと屋根裏であろうとかまわぬ、必要があれば毎晩でも集まる

ことができ、気に合った仕事や娯楽、あるいはいろいろのプログラムや明るい楽しい雰囲気をごこへ行けば見出せるような、そういう場所のことを私はいうのである。もし隊長がごこいう場所を獲得することができさえしたら、自今の隊のある子供たちには良い環境を与えたことになり、それは、さもなくば彼らの心や性格の中に忍びこんだに違いない毒に対して、最も効き目のある解毒剤になるだろう。

それからキャンプ（これは、できる限り回数を多くすべきである）は、隊の本拠よりも更に一步進んだ、ずっと効力の強い解毒剤である。野外の生々しい奮闘気と、テントの中で、野原で、或はキャンプ・ファイアを囲んでの仲間同志という精神、これらが少年たちに最良の気分を呼吸させ、隊長には少年たちをしっかりとつかまえ、自今の人となりを少年たちにはっきりわからせるのにこの上ない機会を与えるものである。

少年たちをつかむには

少年たちを捉えて良い影響のもとにおこうとする人を、私は魚をとろうとする釣人のようだと思う。

もし釣人が自今の好きな食べものをエサにしたとしたら、おそらく多くは釣れまい——特に用心深い、獲物として値うちのある魚はとれないだろう。そこで彼はとりたいたいと思う魚の好物をエサにする。

年も同じである。もし諸君が高尚だと考えることを説明しようとしたら、少年たちの心を捉えることはできないにきまっている。明らさまな“ためになって有りがたい”ものだと、中でも元気のよい子供たちは怖れをなして離れてしまう。実はごこいう子供たちこそ諸君はつかみたいのだ。唯一の方法は、少年たちがほんとうに引きつけられ、興味を持つものをさし出してやることである。そこで諸君は、スカウティングがそれだということ、発見するだろうと私は思う。

そうしてから諸君が少年たちに望むところのもので味つけすればよいのだ。

少年たちに対して力をかすためには、諸君は彼らの友だちにならなければならない。しかし、彼らが隊長に対する遠慮やはにかみをなくするまでは、この足がかりを得るのを急ぎすぎてはいけない。F・D・ハウ氏はその著“児童の書”の中で、ごこのような物語に子供を扱う正しい過程を要約している——

隊長がすることなら、隊員はするだろう。隊長は自今のスカウトたちの中に映し出される。隊長の自己犠牲や愛国心にならって、スカウトたちはみすから進んで自己犠牲や愛国的奉仕を実行する。

”毎日の散歩の道すがら、ある汚い町を通っていたある男が、よごれた顔をした発育のわるい、小さな男の子が、バナナの皮で遊んでいるのを見かけた。彼はその子にあいさつして見せた——とその子は怖がって尻ごみしてしまった。翌日また彼はあいさつして見せた。その子は別に怖がることはないのだとわかったらしく、彼に唾を吐きかけた。次の日は、その子はその男をじっと見た。そのまた次の日散歩して行く男を見ると、その子は“こんちは？”と呼びかけた。そうしているうちに、その子は男のあいさつを待ちうけていて微笑み返すようになった。おしまいには、その少年が——そのちつばけな子が——町角で待ちかまえていて、その汚い小さな手で、その男の指を握るようになった時、ついに勝利は完全となったのであった。それは物淋しい、みすばらしい通りであったけれど、その男の生涯を通じてそこは最も輝かしく明るいと思われる場所の一つとなったのである。

スカウティング

活潑な戸外生活はスカウティング精神を体得するための秘訣である

スカウティングは少年たちにとって一つのゲームである。少年たちの采配によって行なうこのゲームで、兄貴分たちは弟分たちに健全な環境を与えることができるし、また例えば自今たちの社会人生を養うために役立つようないろいろの活動をすすめることもできる。スカウティングとはごこようなゲームである。

このゲームの最も強い魅力は、自然について学ぶことと林間生活技術（ウッドクラフト）である。これは集団でするので

なく各個人が取り組むものである。これはまた、純粹に肉体的あるいは精神的な能力とともに知的な内容をも向上させる。

はじめは以上のような目標をみざすことだけを心がけたものであったが、——経験を重ねた今日では、正しいやり方をすれば（目標をみざすだけでなく）目標としたものを身につけることができるのだということがわかった。

スカウティングの目的と方法の最もよい説明者は、ニューヨークのコロンビア大学師範部のジェームス・E・ラッセル部長ではないだろうか。ラッセル部長はこう書いている——

”ボーイスカウト運動のプログラムは、少年用のサイズに裁断した一人前の男の仕事である。スカウティングは、彼がまだ若いから魅力を感じるというだけではなく、これら一人前になって行く一個の男だからひきつけられるのだ・・・スカウティングのプログラムは大人もしないようなことを少年に要求しない、その代り、少年の現在の場所から行きつくべきところに達するまで、一步一步引っぱって行く・・・”スカウティングの著しい特長は、その課程というよりもむしろその方法にある。少年たちに正しいことをやらせ、正しい習慣を身につけさせるように、導いて行く組織的な計画として、スカウティングは最も理想的である。スカウティングの実行で二つのことが目につく——一つは習慣が形づくられるということ、他の一つは進取、自制、自信、自立の機会を得ることである。

”進取の気を養うについて、スカウティングは単に少年にプログラムを与えるだけに止まらず、その運営の機構をすばらしい方法でさせている。その運営方式をみると、外見を飾った他の方法などを打ちやぶるすばらしい機会が備えてある。これを班と隊において見ることができる。これは少年たちにチームになって活動することを教えている。共通の目的に向かって協力するようにさせるのであるが、このこと自体が民主的である・・・

“スカウトたちを、聖人ぶった報酬を得ようというような変な精神からでなく健康な愉快な気分で、まず手始めには善行をするように、そしてその次に前進して社会のために貢献するように、導き励ますことによって、諸君はスカウトたちの上達やしつけや知識を増すよりもっと大きなことを彼らのためにしてやることになる。というのは、いかにして生計を立てるかということよりも、いかに生きべきかということ教えることになるからである。”

スカウティングは簡単である

スカウティングは外部の人にとって一見非常に複雑なもののように見えるらしく、少年たちを教えるためには山のように多くの、いろいろの種類のことを知らなければならないのだと思ひこんで、隊長になることをしりごみする人が多いようである。しかし、次のことがわかりさえすれば、誰もしりごみすることはない——

1. スカウティングの目的は実に簡単である。
2. 隊長は、少年が興味を持ち、実際に手をつけて自分で間違いなくできるまでやり続けたいと思うような活動をいろいろ指示して、少年が自分で学ぼうという野心と希望を持つようにする。（このような活動は“Scouting for Boys”に細示してある）。
3. 隊長は自分の隊の班長を通じて仕事をする。

スカウティングの目的

スカウト訓練の目的は、我々の将来の社会人としての在り方の標準、特にその性格と健康について改善し、利己を奉仕におきかえ、青少年を道徳的にも肉体的にも個々の人間として役立つものに育て、その有用性を他人に対する奉仕に使うようにする、これである。

社会人性とは一口にいうと“共同社会に対する積極的な忠誠”ということになっている。法律を守り、自分の職業に励み、国の安泰について心配するのは“守護の神さまにお任せして”政治やスポーツやその他の活動については自分の好きなことをする、だから自分はよい社会人だ、よい国民だと考えていられるのは自由の国であるなら誰にでもできる、当り前のことである。こんなのは受動的な社会人性である。しかし、受動的な社会人性では自由と正義と名誉の徳をこの世の中に保持して行くために不十分である。積極的な社会人性のみがそれをなし得るであろう。

スカウト訓練の四部門

自分から進んで働きかける社会人性を育てて行く目的を達成するために、よい社会人を作り上げるに欠くことのできない次の四つの部門を我々はとりあげ、それを外面からでなく内面から教えこむ

人格(性格)——これを我々は次のことによつて教える——班制、スカウトのおきて、スカウトの教訓ばなし、ウッドクラフト、班長の責務、チーム・ゲーム及びキャンプ課程に必要な知識、これは創造主なる神をその創造物を通じて認識すること、自然の美しさを感じずることを含み、それは戶外生活で馴染みになる植物や動物への愛を通じてされる。

健康と力——これは、ゲーム、運動、及び個人的な衛生と食餌に関する知識によつて得る。

工作と技能——屋内活動によつて行なわれる場合もあるが、多くは特に開拓、架橋、キャンプ、手工芸などによる自己表現など、すべて有用な働き手を作るようなことを通じてする。

奉仕——ささやかな善事をはじめとして自分たちの周囲の小社会に対する奉仕、事故の場合や人命救助に至るまで、“善行”による宗教信仰の実行を日常生活にとりいれることである。これら四部門の細目は後の表に示すが、説明はこの本の第II部に掲げる。

スカウティングの諸活動

“スカウティング”という言葉は、森林生活者、探検家、猟師、船乗り、飛行家、開拓者、辺境移住者などの作業と属性という意味になる。

これらの作業や属性の要点を少年たちに味わせるために、我々は少年たちの要求と本能を満足させ、同時に教育的なゲームと実行の一体系を提供する。

少年の立場からいうと、スカウティングは少年たちを兄弟愛の一つのギャング(児群)に組織してやることで、このギャング組織というのが、遊びのためであろうとワルサのためであろうと又はノラクラするためだろうと、彼らの自然な形であるからで、またスカウティングは彼らにスマートな服装と装備を与え、彼らの夢とロマンスに訴え、しかも活発な戶外生活をさせる。

親の立場から見ると、スカウティングは我が息子に身体的な発育と健康を与え、よいしつけと胆力と武士道精神と愛国心を備えさせる——一言にしていえばスカウティングは、我が子が人生の道を進んで行くために何よりも大切な“人格”(性格)を作り上げるものである。

スカウト訓練は上下貧富あらゆる階層の少年たちをひきつけ、聾啞盲目など身体障害の少年たちにさえ興味を持たせる。学びたいという“願望”を呼びおこすのである。スカウティングの活動は少年のいろいろの考え方を研究した結果、教えられるのではなく、みずから習い覚えようとするようにし向けることを原則としている。

水泳、開拓、料理、森林作業などができることや、そのほか男らしさ、役に立つことなどを証明する一級二級の進級章のほかに、スカウティングは、いろいろの種類の楽しみごとや手工芸などが熟達すれば得られる技能章を通じて、技術的習練のよいイトグチを与える。我々が初級でこんなにも多くのことを試みるその目的というのは、十人十色の少年たち

がいろいろの種類のことを試みてみるようにし、注意深い隊長が少年各個の特別な傾向を認めて、それに応じた指導奨励をしてやるからである。これが個性を伸ばし、生涯の仕事に足がかりをつけさせる最良の道筋である。その上、我々は少年が自分で自分の身体の発達と健康に責任を持つことを奨励し、また我々は彼の名譽心に信賴して毎日誰かに対して善事をするを期待する。

隊長に少々なりとも少年の心があって、すべてを少年の立場から見ることができれば、そして創意力に富んでいる人なら、新奇なものを求める少年の渴望を充たしてやるために、ちよいちよい変化をつけては新しいプログラムを発明することができるはずである。劇場を見るとよい。ある演し物が見物に受けないとわかったら、千秋楽の頃には受けるようになるだろうなどと思って打ち続けはしない。その催し物をやめて別の新しいものとさしかえる。

少年たちは汚く淀んだ水たまりにも冒険を見出すのであるから、もし隊長が童心を持った人であれば自分にもそこに同じ冒険が見出せるはずである。新しい思いつきをひねり出すためには大した費用も道具もいらぬ。少年たち自身がいろいろの思いつきを出してくれることが多いからである。

少年たちをひきつけるプログラムを見つけるために更に進んだ方法は、隊長が耳を使って頭を休めることである。

戦争で斥候兵が暗夜出て行って敵の動静を探ろうとする時は、大部分耳をすまして聞くことによって情報を得る。それと同じに、隊長が自分の隊員たちの傾向あるいは性格がどんなものか皆目わからない時、大方のことは聞くことによって知ることができる。

耳を立てていることで隊長は各少年の性格についての細かい見通しと、その少年に最もよく興味を持たせる方法が何であるかを知ることができるはずである。

班長会議での討議やキャンプ・ファイアを囲んでの話しの時でも同じである。黙って聞くことと観察することを自分のなすべき特別な仕事にすれば、諸君が説教して少年たちに注入できるものよりもずっと多くの知識を彼らから得ることができるだろう。

また、父兄を訪問する時、スカウティングの価値を説きつけようなどと思つてはいけぬ。それよりも、息子たちを訓練するについての彼らの考え方は何か、スカウティングに彼らは何を期待し、あるいは何を不足と思っているか、聞き出す方がよい。

一般的にいつても、よい思いつきがない時でも、スカウトたちが当然好きはずだと諸君が考えるものを彼らに押しつけてはいけぬ。それより、耳を立てることによりあるいは質問することにより、みんなが一番好きなのは何かを知り、それらをどの程度に——つまり少年たちの好きなことが彼らに果して有益なものようであれば——やればよいか考えるべきである。

楽しい笑いごえが響き返り、競技の勝をよろこび、新しい冒険に新鮮な興奮を湧かせるような隊ならば、退屈のために隊員が減って行くことはないに違いない。

社会人性育成のための
スカウト訓練計画分析表

1. 人格(性格)

次を目的として次を実行して

公 民

フェア・プレイ

他人の権利尊重

し っ け

指導性・責任

徳 性

名 誉

武士道精神

自恃・勇気

物事を楽しむ能力

高尚な思想

宗 教 心

敬 虔

自 尊 心

忠 誠

次を実行して

班 作 業

チーム・ゲーム

名誉会議

班長会議

スカウトのおきて及びちかい

スカウト作業及びその他の活動

自然の鑑賞

自然にまつわる教訓及び自然研究

天文知識

動物愛護

他人への奉仕

そ の 他

(次表参照のこと)

3. 健康と力

次を実行して

健康

力

次を実行して

自分の健康に自分で責任を持つ

衛 生

節 制

制 慾

キャンピング

身体の発育向上

ゲ ー ム

水 泳

ハイキング

山登り・野外活動

3. 手工芸と技能

次を目的として

技術的熟練

創意工夫

知 力

観 察

推 理

自己表現

次を実行して

スカウトクラブ

キャンプ技術

新分野に手をつける

技能章獲得

種々の手工芸によって

道楽(訳者註・Hobbies——楽しみでやるもの)

林間生活技術

追 跡

4. 奉 仕

次を目的として
利己主義でないこと
公民の義務
愛 国 心
国への書仕
人類への奉仕
神への奉仕

次を実行して
スカウトのおきて及びちかい
善 行
救 急
人命救助
防火消防の技術
救援隊活動
病院手伝い
その他社会奉仕

スカウティングは野外でする愉快的なゲームである——そこで、少年の心を失わぬ大人と子供が兄と弟のように一緒に
なって冒険をしてまわり、健康と幸福と工作と人助けになることを収穫する

スカウト精神

基調となっている特色はスカウト運動の精神で、この精神を解く鍵はウッドクラフトと自然教訓のロマンスである。

いやしくも少年なら、否このことについては大人といえども、この物質的な時代にあつて誰か大自然と野外生活の呼び
ごえにひきつけられないものがあるろう？

それは原始的な本能であるかもしれない——しかし、その本能は実在する。ただ新鮮な空気と太陽の光をさもなくば灰
色の人生に導き入れるだけにせよ、この鍵で一つのすばらしい扉を開くことができるのだ。

しかし、普通それ以上のものが得られる。

大自然の勇者たち、辺境の移住者や探検家、海上の漂浪者、雲の中を行く飛行家たちは少年たちにとってのパイプ
パイパー（記者註・Pied Piper、笛の音で引きよせハムリンの町の鼠を全部捕えたが、そのあと、町の子供がみんな
その笛の音について行ってしまったという伝説の魔法の笛吹き）である。

笛吹きが連れて行く所へ少年たちは従い、笛が男らしい勇敢な歌、冒険と努力の歌、有能と熟練の歌、他人のために
快くおのれを捧げることを歌った歌をうたう時、彼らはその笛の音につれて踊るであろう。

ここにこそ少年のための肉があり、魂がある。

はるか遠くに目を向けて歩いて行く少年を見るがよい。彼が夢みるものは彼方の大平原であろうか、模糊たる大海原で
あるろうか？いずれにしても、手近にあるものではない。わかり切っているではないか！

諸君はケンシントン公園で野牛の群を見たことはないか？またアルバート記念館のかげにあるスー・ロッジ（スー族イン

ディアン的小屋)から立ち昇る煙が見えないか？私はここ数年もこれを見ている。

少年たちは今やスカウティングによって、森林生活者の偉大なる世界団体(訳者註・スカウトのこと)の一人として開拓者の装具に身をよそおう機会を持つことができるのだ。いろいろの足跡やしるしを追い辿り、信号をあげ、自分で火を焚き、自分で小屋を建て、食い物をつくることのできるのだ。開拓者の、あるいはキャンプの技術のあらゆる事柄を自分でやることのできるのだ。

少年の夢は大平原や大海原のかなたに広がる。スカウティングをする時、彼はインディアンや開拓者や森林生活者になったような気持ちになる。

彼は少年仲間の指導者によって導かれる自然なギャング(児群)に所属する。

彼はけもの群の一匹かもしれない。しかし自分自身の本性はちゃんと持っている。自然の中から人生のよろこびを知るようになる。

さてそこには精神的な面もあるのである。

森の中のハイクで自然の教えの幾しずくかを飲みこむことによって、小さな魂は成長し、あたりを見まわす。野外は観察と驚くべき宇宙の不思議の数々を知るための優秀な学校である。

それは日毎目の前に存在する美しいものを鑑賞する心を開かせてくれる。煙突のかなたの空に星があることを、映画館の屋根の上に夕やけ雲がかがやくことを都会の子供たちにわからせてくれる。

自然について学ぶことは、無限についての、歴史上の、そして微小物についての諸問題を、大いなる創造主の仕事として一つの調和された全体にまとめて教えてくれる。これらの中で、性も生殖も名誉ある一つの役割を果すのである。

スカウトクラブは最も無頼な少年をも高尚な思想と神を信ずる領域へと導く一つの手段であり、これは日毎に善行をするというスカウトの努めと相まって、親や牧師がその望むところの信仰の形を築につくり上げることができるような神と隣人への努めの基礎を与える。

“カウボーイのように、太郎や権べエのように、子供を着飾らせることは思いのままであるし、ペンキのようにピカピカするまで磨き上げてやることもできる。けれどそれからお尻を引ばたいてやったとしても勇者や聖者に仕上げようとは、どっこい、そうはいかない”

これをなし得るものは外見の飾りではなくて、内なる精神である。

しかもその精神は、よく知ってみれば少年の誰にでもあるので、ただそれを見出し、あらわしてやりさえすればよいのである。

彼の“名誉にかけて”実行するスカウトのちかいが少年の心の中にある限り、それとスカウトのおきては我々をくくる修行の武器であって、100人のうち99人までこれが役立つ。少年は“するな”によって支配されないが“する”には従う。スカウトのおきては少年の欠点を抑圧するためでなく、むしろ彼の行動の手びきとして工夫されているのである。よいしつけとは何かを単に述べそれをスカウトに期待しているに過ぎない。

班 制

班制は、スカウト訓練が他の諸団体の訓練と異なる一つの重要な特色であって、この班制が正しく用いられれば、成功すること絶対確実である。成功せざるを得ないのだ。

6人から8人の班に組織し、それぞれ信望ある指導児(班長)のもとに別単位にして訓練することは、よい隊をつくる秘訣である。

班は、仕事のためであろうと、遊びのためであろうと、訓練や義務のためであろうと、常にスカウティングする単位となる。

人格(性格)訓練のための貴重な一歩は、一人一人に責任を負わせることである。このことはまず班の責任ある指揮見となるべき班長をきめることですぐ実行できる。自分の班の班員一人一人をしっかりと捉え、その質を向上させることは一に班長の責任である。これは大へんな任務のように聞えるけれど、やってみればできるのである。

そこで、班と班との間の張合いと競争によって班精神というものが生み出されるのであるが、これは少年たちの氣風を高揚し、全体的に有能さの標準を一層向上させることになるから、非常に申し分がない。班の中で少年たちは各自が一つの責任ある単位であること、また自分の班の名誉はスカウティングをする自分の能力如何にある程度かかっていることを自覚する。

班長会議——名誉会議

班長会議と名誉会議は、班制の重要な一部分である。これは一つの常任委員会であって、隊長の指導のもとに、隊の管理、訓練、両方の事柄を処理する。この会議はそのメンバーたちに、自尊心と自由の理想に加うるに、責任感と権威に対する尊敬心を養い、同時に個人的全体的に将来の社会人たる少年たちに貴重な議事手続の練習をさせることになる。

班長会議は常例の事柄とパーティーとかスポーツのような隊の催しごとその他を受持つ。この会議に次長たちも仲間入りさせることが都合のよいことが多いが、次長たちの助けも得られると同時に、彼らにも議事手続の経験と練習をさせることになる。名誉会議の方はもっぱら班長だけで構成される。名誉会議は、その名の示すように、訓戒、表彰の問題などを扱う特殊の役目を持っているのである。(記者註・日本で少年幹部会議、通称グリーンバーといっているものがこれに当る。)

班制の価値

班制から得られる非常な価値を、隊長が認識することは大切である。それは隊の永続的な活動力と成功のための最も良い保証である。班制は隊長の肩から、きまり切った小さい仕事の大部分をはずしてくれる。

しかし、第一に主要なのは——班制は各個人にとって人格(性格)養成学校であるということである。班長にとっては、それが責任を負うことと指導精神の内容についてのよい実習となる。班員にとっては全体の興味と利益に対しては自我を二の次にすること、協力と仲間同志というチーム精神に関連して克己と自制を本領とすることを班制で学ぶことができる。

しかし、この班制からほんとうに良い成果を得るには、少年指導者(班長たち)に真に自由に責任をとらせてやらなければいけない——もし部分的な責任だけを与えたとしたら、部分的な結果しか得られないだろう。これの主要な目的というのは、少年たちに責任をあてがってそれだけ隊長の面倒を減らそうというのではなく、少年たちの性格を伸ばすために最もよい方法だからなのである。

権威と責任を班長の手にほんとうに委ねている隊は最もよい進歩を遂げる。これぞスカウト訓練の秘訣である

成功を希望する隊長なら班制とその方法について書いてあることをよく研究するばかりでなく、読んだことを実行に移さなければいけない。大切なのは物事を実行することで、絶えざる試みによってのみ班長もスカウトも経験することができるのである。隊長が隊員たちにやらせればやらせるほど、彼らの反応は大きく、力と性格はますます伸ばされるにちがいない。

スカウトのユニフォーム

“スカウトが自分の務めをわきまえ、おきてを実行している限り、ユニフォームを着ようと着まいと少しも構わない”と私はよくいったものである。しかし実際を見ると、ユニフォームが買える者で着ていないスカウトは一人もいない。

止むにやまれぬ気持がユニフォームを着させるのである。

同じことがスカウト運動を動かしている人たら——隊長や役職員たちにも自然に作用している。彼らは、もしいやならユニフォームを着る義務はないのである。しかし、同時に、彼らは自分たちのことより、むしろ他の人たちのことを考慮しなければならぬ地位にある。

私個人のことをいえば、たとえ一班を訪れる時でも私はユニフォームを着る。これは少年たちの精神を高めるのに役立つと信ずるからである。ユニフォームは一人前の大人にならないものだけが着るわけではないのだ、ということがわかれば少年たちのユニフォームに対して持つ価値感が高まり、自分たちと同じ兄弟仲間であることを重要に考えられる大人たちから、自分たちが真剣に扱われているのだということがわかれば、少年たちはみずから高く評価する。

ユニフォームのみだしなみのよさ(スマートネス)や細部に至るまでキチンとしていることなど、些細なことと思われるかもしれないが、自尊心を養う上に価値があり、見える所だけで判断する外部の人々からスカウト運動がどう思われるかを考えると、ユニフォームは重大な意義を持つのである。

手本を示すことが大きく取り上げられる。しまりのない身なりをした隊を見せてごらん。私にはしまりのない身なりをした隊長だなということがすぐわかる。諸君がユニフォームを着る時、あるいは小イキに傾けた帽子の被り具合を確認してみる時このことを思い出してくれたまえ。

諸君は隊員たちのモデルであるから、君たちの身だしなみのよさは彼らにすぐ反映するにきまっている。

隊長の担任

スカウティングの原理はすべて正しい方向をとっている。これを応用して成功するかしないかは、隊長の責任であり、隊長が如何に応用するかにかかっている。特にこの点について隊長を助けようというのが、いま私が目的とすることで——第一にスカウト訓練の目的を示し、第二にそれを実施して行くのによいと思われる方法を参考に供したいと思う。

大方の隊長たちは、細かい点まではっきりしたことを教えてほしいと思っていることだろう。しかし、ある土地のある隊又はある種の少年に適當なことが、そこから1哩と離れていない所でもいうに及ばず、ましてや世界の各地、全然ちがう状態の国々に存在する隊や少年には適當ではないだろうから、細かい点まではっきりいうことは実際不可能である。そうはいうものの、一般的な参考になることをある程度提供することはできる。それを応用しながら、隊長は自分の隊がうまく行くためにはどんな細目がよいか自分で判断をするわけである。

しかし、細かい点にわたる前に、もう一度繰り返させてもらいたい——仕事を重大に考えすぎでおじけるな、と。一たん目的がわかりさえすれば怖れはたちまち消えてしまう。そうしたら、目的をいつも念頭において、それにふさわしい細目を用いて行きさえすればよいのである。

“山頂のピーヴリル”(註・ウォルター・スコットの小説)にあるように——“理想は高くあるにせよ、我々の最高の理想を成し遂げるかどうかは問題ではない”。

時として、輝かしくも可能と思われることをほとんどかき消してしまうような困難が被いかぶさってくることがある。けれども、困難は大いそれほど大きくなく、諸君が詰めよるにつれて消え去るものなのだ、ということ覚えていければ気が楽であろう。次の古いニグロの歌を読んで安んじてくれたまえ——

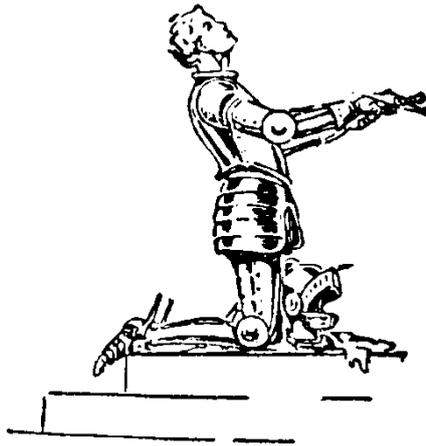
“鉄道線路のすーんと向うを眺めるとき、頭かかえて、苦心さんたん考えこむよ、二本のレールがくっついてしまってるに、ハア、一体どうして汽車は行けるもんだか？

“だけんど機関士は一向心配もせんらしい、だってさ、汽車は突っ走ってくるものな。そこで、そばへ寄ってよつく見たれば何とレールは二本、線路もオーライさ。

“おら達もちょうり同じこって、さきの暮しは心細くて、どう切抜けたらええもんか、だけんど、その場になってみりや思ったより広くて十頭曳きの荷車さ通れるってわかるだからな！

(サタデーモーニングポスト紙より)

第 II 部
社会人性を育てるスカウティング
人 格 (性 格)
健 康 と 力
工 作 と 熟 練
奉 仕



騎士のおきては今は紳士の道として行なわれる

I 人 格 (性 格)

国家の繁栄は、軍備の強大よりも、その国民の公民としての人格(性格)の結集によることの方が多い。”

“人間にとって、生き甲斐のある生涯を送るためには、学識よりも人格(性格)の方がずっと肝心である。”

(記者註・原書では Character 訳語の人格という言葉は、人の性格、品格、人となり、人柄などの意味を持つ)

それゆえ、人格(性格)は、一国にとっても一個人にとっても、一番の価値を持つものである。しかし、もし人格(性格)が人の生涯を形づくるものであるとすれば、その人が社会に踏み出す前に、まだ少年で物事を受け入れやすいうちに、人格(性格)は養われるべきである。少年のなかに人格(性格)をねじこむことはできない。人格(性格)の胚芽ははじめから子供のなかに存在しているのであるから、それを引き出し、伸ばしてやる必要がある。では、それをいかにしてするか？

ごく一般的にいうと、人格(性格)は環境もしくは周囲の状況から成長するものである。例えば、ここに、双生児でもよい、二人の子供を取り上げてみよう。この二人に、学校では同じ課目を教える。しかし学校外の環境は遊び仲間も家庭も、全く違ったものを与える。一人はいつくしみ深く子供を励ましてやるような母親のもとに、身ぎれいな素直な遊び友達と交わり、世の中のきまりその他に従って行くので彼の面目も信頼されている。一方、もう一人の子供は、だらしのない家庭で、口ぎたない、手くせの悪い、不平不満の仲間の中へ放任してみよう。この子供はその双生児の兄と同じだけの人格(性格)を養うことができるだろうか？

幾千幾万の少年たちが、人格(性格)の欠けた人間になるに任せて日毎にすさんで行き、無益のやくざものとなり、彼ら自身の不幸であるばかりか、その国の苦悩と危険を来らせている。

彼らの生涯の最も感受しやすい時期に、適当な環境が与えられさえすれば彼らは救われるはずである。またほかに、

それほど下層に属しているわけではないが(やくざのものは社会のあらゆる階層にあるものだから)、適当な年頃に人格(性格)を養い育てるように向けられさえすれば、もっと良い人間となり、国のためにも有用な、自分でも満足するような人間になれる少年たちが幾千幾万とあるのである。

そこで、この点にボーイスカウト訓練の最も重要な——教育という目的があるわけだ——しかし、教育といっても、諸君よろしいか、指図することではないのですよ、教育、つまり少年たちが自分から望んで、人格(性格)を養成するにふさわしい物事を、自分たちで学ぼうとするように引っぱって行ってやることである。

なぜ一隊 32 名を越えてはならぬかという一つの理由

一隊の人数はどちらかといえば 32 名を越えてはいけない。私がこの人数をすすめるわけは、私自身で少年を訓練するに当って、私の手に負えるのは——一人一人の性格を理解し、引っぱり出してやれるのは——せいぜい 16 名ぐらいだということがわかった。それで他の人なら私の二倍は能力があると思うので、合計 32 名までというわけである。

60 名あるいは 100 名もの立派な隊をもっているという人がよくある。またその指導者たちは少数のグループと同じによく訓練されているという。私は感嘆の言葉を発する(この“感嘆” admiration という言葉を定義通りに解釈すると“驚嘆”という意味になる)。そして彼らのいうことを私は信用はしない。

“何故一人一人の訓練を気にかけるんですか?”と彼らは聞く。それは教育するための唯一の方法だからである。少年が何人いようと、一時に千人であっても、大きな声と興味をひく考えさえあれば、指図し伝受することはできる。しかし、それ訓育ではない——教育ではない。

教育とは、人格(性格)の養成と人間の育成が計算に入ったものことである。

自身を完成しようとするための刺戟剤は、それが適当に徐々に注入されると、本人の気質や気力に最も適した方向に活発な努力を払わせるものである。

一団の少年たちに向って、スカウトのおきてを説教して聞かせたり命令したりすることは少しも役に立ちはない。彼らはおきてを自分なりに解釈し実行したいという野心に燃えているのである。

ここで隊長の人格(性格)と能力が物をいうことになる。

それで、この人格(性格)をつくり上げるに必要な幾つかの内容を、道徳的、精神的の両方から考察し、次いで少年たちがスカウト活動を通してこれらを自分から養って行くようにさせるには、隊長はどうしたらよいのか、考えてみることにしよう。

騎士道とフェア・プレイ

中世騎士のおきては、アーサー王が自分の“円卓の騎士”の規律を定めた西暦紀元前 500 年の頃から、紳士の行動ふるまいの基礎となって伝わっている。

円卓の騎士の物語にはすべての少年たちが興味を湧かし、それは少年たちの道徳感に対して訴えるものを持っている。騎士道のおきてには、名誉、規律、礼儀、勇気、義務と奉仕に対する無私の心、宗教の導きが含まれる。

ヘンリー七世(1485—1509)の時代に再公布されたものによると、騎士道のおきては次の通りである。

1. 夜間休息を目的とする時以外は、決して甲冑を脱がないこと
2. “名声をとどろかし”得るような冒険を進んで探し求めること
3. 貧しいもの、弱いものを守ること

4. 正義の争いにおいて助けを求めるものがあれば助けること
5. 互の気持を傷つけ合わないこと
6. 祖国の防衛と安泰のために戦うこと
7. 利益を求めるより名誉のためにいそむこと
8. いかなる理由があろうとも約束を破らないこと
9. 祖国の名誉のために自己を犠牲にすること。
10. “恥をもて逃ぐるより、まず誠実をもて死なんことを”

騎士の理想とフェア・プレイの理念は、少年たちの心に最もよく注入され得る最上のもので、彼らが真に立派な国民になるとするなら、その人格(性格)の一部分となるべき正義について強い観念を持つように導くものである。

他人の立場から物事をみようとすることの習慣は、“旗取り”であろうと“伝令競走”であろうととにかくフェア・プレイが大切な戶外ゲームを通じて養成することができる。ゲームの間は最も厳格にルールを守るべきで、このことはゲームに参加しているものにとっては、自分勝手を抑え、気持よく行動することであり、ゲームが終わった時、勝った者は敗けた方に同情し、また負けた方は誰よりも先に勝った方を喜び祝ってやるのが礼儀正しいあり方である。

これが身について習性となってしまうまで繰返し実行すべきである。

この公正ということの訓練を更に進めるよい方法は、少年たちが興味を持つ題目について討論会(記者註・この討論は debate であるから一つの題目については是か非かに対立して論ずることである。普通にいわれているディスカッションと混同しないこと)を開くことであるが肯定と否定と両方の論議に力を尽させることができる。この討論会を催すことは、あらゆる重要な問題には二つの面があること、論じられている問題について他の一方の言い分を聞かないうちに一方の論者の雄弁に引ずられてはならないこと、また、両方の言い分を自分でよく判断してから自分はどちらにつくかを定めるべきこと、などを少年たちにわきまえさせて行くことができる。

これを確実にする実際的な段階の一つとして、表決の場合、はっきりしない子やあまり熱心でない子は多数の方についてしまうから、挙手によって決めてはいけない。自分で決めた“肯定”または“否定”を一人一人紙に書いて出させるべきである。こうすれば問題の両面を充分評価してから自分で決めるということが確実になる。

同様に、模擬裁判とか仲裁裁判とかも、もし真剣に法廷のやり方に従ってやれば、少年たちに正義とフェア・プレイの精神を教えるのに非常に役立つし、また成人してからの陪審員又は証人としての公民のつとめとはいかなるものかを、小さいながらも経験させることができる。隊での名誉会議(記者註・名誉会議に関する記者註 参照)も同じくこの方向に導く一つの手段で、ここでは会議の一員として少年たちに実際の責任があるから、自分たちの見解の重大さを一層ひしひしと感じさせ、問題の両面からの論議を聞いてから、取るべき正しい方向について慎重に考えさせることになる。

こうして、フェア・プレイと他人に対する無私と義務の精神を教えようと、自分で工夫をこらすような隊長なら、屋内でも、屋外でも、自分のスカウトたちを訓練するための機会が広範囲に得られるに違いない。我々が扱っているいろいろの問題の中で、ここは極く概略触れたに過ぎないけれど、このことは少年たちを自治的な国民に仕上げて行くための最も重要なことの一つであると私は確信している。(義務と訳したが原語は duty で、使命ともいえる。権利に対する義務とは異なる)

紀 律 訓 練

繁栄への道を行くべき国家は規律正しくなければならないが、国民全体の規律は個々の人間の規律によってのみ得

られる。私がいう紀律とは、権威（訳者註・権威 authorityは法律、国家、政府、司法権など、ひいては正しく権限を与えられている個人、委員会、理事会などをも指す）やその他の義務（duty）の命ずるところに対する従順ということである。

これは抑圧的な方法では達せられないけれど、まず自己の紀律、それから他人のために自我や自分中心の楽しみを犠牲にすることを教育したり励ましたりすることによってなし得る。これを教えるのは、実際の手本により、子供に責任を負わせることにより、また彼を高度に信頼しているのだということをはっきりさせることにより、大きな効果をあげることができる。

責任は、班員の間で起る事柄について班長に責任を持たせる班制を通じて、大体の訓練ができる。

1596年の昔、ヘンリー・ナイヴェット卿はエリザベス女王に向けて、青少年の訓練と紀律をおろそかにする国は、海陸の兵隊を墮落させるばかりでなく、社会生活においても同じく墮落した国民をつくるというはるかに大きな禍を招くものである、と進言したが卿の言葉通りを引用すると次の通りであった——“まことの紀律を欠くにおいては、君と国の両方のものなる御代も富も、施すべくもなく一朝にして滅ぶべし。”

悪いせのある子を罰したからといって紀律がよくなるものではなく、その子の注意をひいて次第に前の悪い方を忘れ、やめてしまうような、もっとよいことを、代りにさせるようにすればよい。

隊長は紀律については、小さなことに至るまで厳格にしかも立ちどころに従うように強調すべきである。少年たちが馬鹿さわざをするのは隊長が許した時に限るとよい——もっともこれは度々あってよいことだが。

名 譽 の 感 覚

スカウトのおきてではスカウト訓練の全体が根をおく基礎である。

その他いろいろの項目を充分に説明し、毎日の生活にいかに応用するかを実際的でわかりよい实例をもって、少年たちに呑みこめるようにしなければならない。

実地の手本にまさる教え方はない。隊長がみずからそのすべての行動において明らかにおきてを実行するならば、少年たちはその模範にたちまち従うであろう。

もし隊長が自分のスカウトたちと同じにスカウトのちかいを誓うならば、彼の示す手本は一層の力を持つことになる。

第一のおきて、即ち、“スカウトの名誉は信辨されることである（スカウトは信頼される）”これにスカウトの将来の行為と紀律の全体がかかっている。スカウトは真正直であってほしい。であるから、スカウトが“スカウトのちかい”を立てるより先に、この点を最初に隊長からよく説明しておくべきである。

スカウトの入隊式はわざわざ儀式のようにするが、そのわけは、小さいながら厳肅莊嚴に行なわれる儀式は深い印象を与えるもので、入隊ということを非常に重要と考えれば、できる限り印象深いものであるべきが当然である。次にスカウトが“おきて”について知識を定期的に復習することが非常に大切である。少年たちは忘れっぽいものであるが、スカウトのおきてを実行しますと厳かな約束をした少年が、いかなる場合にも、その“おきて”が何であるかをいえないということは絶対に許されない。

一旦スカウトが自分の名誉とは何であるかを了解し、入隊式によって彼の名誉にかけて隊員となったら、彼を信頼すべき人物だと思っているのだということを隊長は行動をもって示さなければいけない。臨時でも常任でもよいから何かの役目をつけて、彼がそれを忠実に実行して行くものと期待するがよい。役目をどのようにやっているかと、せんざくしてはならない。自分の思い通りにやらせて、場合によっては苦境に陥らせてみるがよい。それにしてもいかなる場合でも構わずにおいて、その子が自分の最善を尽しているのだと信じてやるがよい。信頼こそ我々の道徳訓練の基礎となるべきもの

である。

責任を負わせるということは、少年の扱いに成功する秘訣で、極めて乱暴者の最もむずかしい子供を扱う場合に特にそうである。

班制の目的はできる限り多くの少年たちに彼らの人格(性格)を育成する意味で、ほんものの責任を与えようということなのである。もし隊長が班長にほんとうの権威を与え、彼に多くの期待をかけて、任務の遂行を任せるならば、彼の人格(性格)発展のために、いかほどの学校教育がなし得るよりも多くの貢献をすることになるのである。

自立心

一級スカウトにならなければ、スカウト訓練のほんとうの意味を身につけたことにならない。一級スカウトになるための進級テストは、そこまで準備ができたことを証拠だて、その少年が立派な男らしい社会人になって行くための初歩の原理を習得したのである、との考えに基づいて規定されているのである。

もはや自分は見習(日本では初級)ではなく、責任があり、物事をやって行くだけの力がある一個の人間として信頼されているのだと自覚するにつれ、少年は自主的になって来る。希望と野心に目ざめてくる。

前より有能な人間になったと感ぜざるを得なくなり、従って自信を持つはずであり、その自信は人生の戦いにおいて何かの時に希望と勇気を与え、成功するまでやり遂げさせるように励ますであろう。

救急、防火、あるいは荷車ひき、架橋などは、手早さや思いつきの用い方の訓練に役立つが、それは他の少年たちと協力して働きながら自分の部署に対して責任を持つわけだからである。



“自分のカヌーは自分で漕いで行く”ように——つまり、行く手を見定めて自分の人生行路を築いて行くように——少年が自立的に工夫に富む人になれるように手伝ってやろう。

水泳も、一つの特技を身につけ、人命を救助する力を得るという点や、呼吸器や四肢の発育の点で、精神的、道徳的、身体的に——教育的な価値を持っている。

私が南阿警察隊の訓練をしていた頃、隊員たちに自分の知能を使いこなして寝食の方途を得ることを教えるために、二人ずつ組にして200マイル、30マイルの長途騎乗に出してやったものである。

しかし、一人、やや鈍いのがいたので、それには頼りにする連れなしに自分で方法を工夫し自分と馬と両方の食糧を工面するように、ただ一人で出かせ、誰の助けもなしで自分の行程の報告を作らせることにした。これは自主心と知能の訓練のために最良の方法であったのでこの方式を私はスカウト訓練に当る隊長たちに確信をもって勧めることができる。

少年たちに望ましい性格を仕こむには、あらゆる学校というものに立ちまざってキャンプが最上の場所である。環境は健全、少年たちは意気昂然と熱心になり、人生の興味深いものに取りまかれ、また隊長はキャンプにいる間は朝から晩まで絶え間なく少年たちを手がけていられる。キャンプでは隊長は、少年一人一人を観察して、その個性を知る最もよい機会が与えられ、従って少年たちを伸ばしてやるために必要な方法を講じることができるし、一方、少年たちは、理解ある隊長の愉快的思いやりある指導によって、紀律、創意工夫、器用さ、自主心、工作、森林知識、ボート操作、チーム精神、自然勉強、その他多くのことを吸収することができる。キャンプのその生活の間に起る人格(性格)形成に役立ついろいろのものを、彼らは自分たち自身でつかんで行く。キャンプ生活の一週間は、集会室で理論を教えられる(これも価値はあろうけれど)六ヶ月に匹敵する。

であるから、キャンプのことをあまり経験していない隊長たちは、いろいろの方面からキャンプというものを研究し学ぶべきだということを強調しておく。

人生を楽しむこと

大自然の教訓がスカウト活動の中で大切な鍵だと考えられるのはなぜか？

この質問にスカウト活動と一般の少年団体の活動の違いが見出されるわけである。

この質問は次の一句によって簡単に答えられる——“我々は少年たちに、いかに生活の道を得るかというばかりでなく、いかに生くべきかということも教えるつもりだ”つまり、一きわ高い意味で、いかに人生を楽しむかを教えようというのである。

大自然の教訓(Nature Lore)——私は今までにこのことを度々すぎるほどいっているかもしれないけれど——これは少年たちの心と思想をひらくための最上の方法で、同時に、隊長がその要点を見失わないように導きさえすれば、大自然の美しさを感じ取る力を与え、ひいては芸術の美を、というようになって人生のより高い楽しみへと少年たちを導くものである。

このことが、その驚くべきわざなる大自然を通じてその創造主である神を知ることに加えられ、更にこの神の意志を他人への奉仕によって積極的に実行することが伴うならば、それは信仰の確固たる基礎をつくり上げることになる。

幾年か前のこと、私は息を引取ったばかりのある友人の家の居間に座っていたが、テーブルの上の彼のパイプと煙草入れに並んで一冊の書物——リチャード・ジェファリーズの“畑と園い並木”がおいてあって、その本の耳を折ってあるページを見ると次のような文章があった——“精神的善の概念は全体として満足のものといえない。現在の我々にわかっている善の最高の形は純粹の無私、即ち、現在または将来にも何らの報いを得ようというのでもなく、いかなる仮想の計画を成就しようとのためでもなしに善事を行なうことである。これが我々にわかっている限りの最善であるが、それでも何と不充ちなことか！自己犠牲の苦心を払って生み出されるものよりも、心の奥底からの願望がもつと充分に満足されるような方法が必要である。それは何か美と理想の認識と一致するものでなければならぬ。個人の徳性だけでは充分でない。理想の善とはこれとはつきり名ざすことはできないけれど、それはある意味で、大自然の持つ理想的な美と密接な関係にある何ものかであるような気がする。”

いいかえれば、幸福とは内面の良心と、外面に表われる感覚とが結合して働くものだといってよいかもしれない。良心と感覚とが共に同じように満足されてこそ得られるものである。もし上記引用した定義が正しいとすれば、逆のいい方も少なくとも同じ位に確かであろう——つまり、良心がやましくないのでなければ、美を感じるといっても幸福になり得ないということである。それゆえ我々が少年たちに人生の幸福を得させようというのであれば、他人に対する善行を実行させ、それに加えて大自然の美しさを感じ得させなければならない。

今、最後に述べたことへの近道は、大自然の教えの中にある——

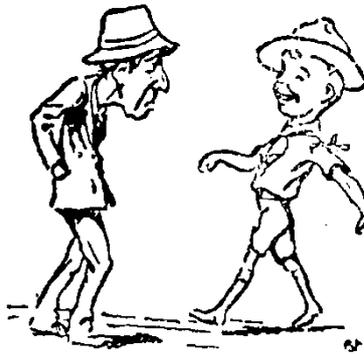
“…書物はせせらぐ小川の中に、

教訓は石の中に、善はすべての中にあり。

大集団の中では少年たちの目は開かれませんが、隊長には開眼手術というやり甲斐ある喜びが与えられている。

少年の心の中にウッドクラフトの胚芽が一たん侵入すると、観察、記憶、推理の力は自然に成長して、やがて彼の人格(性格)の一部として形成される。これは、その後他のどんな道に入ろうと、その少年の人格(性格)の部分となって残るのである。

若い心に大自然の不思議が解明されるにつれ、その美しさにも目につき、次々と認識されて行く。一たん心の中に美の感得力が与えられれば、観察の力と同じようにこれも自然に成長をとげて、暗黒きわまる環境において喜びをもたらす役をしてくれる。



少年が戸外で心地よい顔つきをしているとすれば、それは一つの取柄である。多くの通行人たちも明るくされる。より大きな幸福への一歩として少年をこういう顔つきにさせることは、やり甲斐のある仕事である。

また脱線させてもらえるなら、ある暗い冷い霧の日の、バーミンガムの大きな陰気な停車場でのことだった。私たちはうすよごれた労働者や旅の埃にまみれた兵隊たちの人ごみにもまれていた。私はその人ごみを押し分けながらも、歩き出しては見まわし、進んではまた見まわし、更に歩を進める前についに目を見はらせるものにぶつかった。私の連れは気がつかなかっただろう。しかし私はその暗い人ごみの谷間で新しい喜びを与えてくれる一条の日光を捉えたのであった。それは黄色と赤茶色の菊の花束を抱え、褐色の制服を身につけた見事な金髪の一看護婦の姿であった。大して驚くことはないじゃないかといわれるかもしれない。たしかにそうだ。しかし、見る目を持つ人々にとっては、暗鬱きわまりないものの中にさえ、こういう輝きは存在しているのだということである。

少年たちには美や詩の鑑賞などできはしない、というのが極く一般の考え方である。しかし、こういうことがあったのを覚えている——数人の子供たちに嵐の風景を描いた絵を見せた。この絵についてはラスキン(訳者註・ジョン・ラスキン 1819 - 1900 年イギリスの有名な作家、美術評論家、社会改革者)が、この嵐に吹き荒らされた光景の中に平和のしるしが一つだけあるといっているのであるが、ところが何も知らぬ一人の子供が、風に吹きまかれる雲の切れ目から一点青い静かな空が見えるのを、やすやすと指さしたのである。

詩もまた、どういう点でという説明はしにくい、やはり子供に訴えるもので、その美しさにひきつけられ始めると、少年の心は日常の散文ではない何か他の形で自分の心を表わそうとしたくなるらしい。

最もすぐれた詩には散文の中に見出されるものも勿論あるけれど、一般に韻律のあるものが大部分である。しかし、大望を抱く若い詩人にとっては韻は大難関となるから、もし諸君が詩作を奨励しようものなら、拙劣きわまる作品で攻め立てられることになるだろう。できることなら少年たちを愚作から引き離すがよい。流行し出したら蔓延してしまう。

識見の発展—敬虔

識見の発展は神への尊敬——“敬虔”という言葉が最も適当であろう——それは自然にはじまる。

神に対する敬虔、他人に対する敬虔、神の僕(しもべ)としての自分自身に対する敬虔、これが宗教心のすべてのあり方の根底である。神に対する敬虔の表わし方は、教派や宗派によって違う。子供がどの教派または宗派に属するかは、概して両親の希望に従うことになっている。(記者註・外国の中には一般家庭で宗教意識ないしは宗派観念のはっきりしているところが多い。)決めるのは親たちである。我々の仕事、親たちの希望を尊重し、それがいかなる宗教であろうと親たちがその子に敬虔の心を教えこもうとする努力を補助することである。

我々スカウト運動での宗教教育には、あまり多くの種類の宗派があるために、多くの困難があるに違いないから、神に対する勤めの細かい点は、地元の当局者に大部分任せなければならない。しかし、人間についてすべきことをなにかと示すのは、他人への奉仕のことは大抵どの宗教にいられていることだから、少しも問題ない。

次に掲げるのは、スカウト運動が宗教に関してとるべき態度で、我々の会議において各宗派の首脳者たちの賛成を得たものである。——

(a) “すべてのスカウトは何れかの宗教に帰依し、それぞれの礼拝に出席することが望ましい。

(b) “ある一隊がある一つの宗教宗派の信者のみによって結成されている場合、隊長は牧師あるいはその他その宗教の教職者と相談の上、その宗派の儀式、しきたり、その他について自分が最もよいと考えるように取りきめてもらいたい。

(c) “各種の宗教のスカウトたちによって構成されている隊では、各自の宗派の礼拝に出席することを奨励すべきであり、キャンプにおいては日毎の祈禱や週毎の礼拝行事は極めて簡単なものにし、それへの出席は随意とすべきである。”

隊長が上記の表示に従いさえすれば、処置を誤るようなことはないはずである。

敬虔のことを教えこむ方法は一つならず数多くあると私は確信する。どうしたらよいかは、それが“手に負えぬ子”であろうと、“甘ったれのお母さん子”であろうと、その子供の個性や境遇に応じなければならない。ある一人に適した訓練が別の一人には大した効果を持たないこともある。隊長にせよ牧師にせよ、指導者の方で適当な方法を選ぶことである。

宗教とは“教えられる”ものでなく、ただ“捉えられる”ものである。日曜日用(記者註・教会行やお寺まいり用)によるゆきを着るような、外側を包む飾りではない。少年の人格(性格)の真実の一部であり、魂の発展であって、剥ぎとれるような虚飾ではない。人間性の問題、内なる信念の問題であって、教授する問題ではないのである。

数千の青少年を手がけて来た私自身はかなり広い経験からいうと、私は彼らの行動の相当大部分は決して宗教的信念によって導かれてはいない、という結論に達している。

これは多分に、少年の宗教教育に当って教育でなく教授が行なわれたからであろう。その結果は、なるほどバイブルクラスや日曜学校の優秀生徒はその概念をよく掴んではいる。しかし、定義に熟達したため、彼らは教えの真の精神を見逃がし、視野の狭い熱狂信者となる一方、他の大多数の者は少しも熱心にならず、バイブルクラスや日曜学校をやめるとすぐ無関心不信仰になってしまつて、人生の重大な時期——16歳から24歳ぐらいの時に際して彼らを支える手が無い、ということになるのである。

誰でも、宗教上のよい指導者になれるわけではない、大熱心者が大失敗者になることもよくある。——しかも自分で気づかないで。

幸い、我々の隊長たちの中にはこの点で立派な資格をそなえた人たちが多くあるが、また中にはこの点について自信のない人もあるに違いない。こういう人たちは、自今の隊のためによろしく聖職者かこの道の経験者の助けを得るべきである。

しかし、実行の面では、ちょうど宗教専門家がキャンプやクラブで隊の少年たちに、学校で理論的に学んだことの実際の応用を教えて、隊長を応援してくれるように、隊長がその宗教家を助けることは、あらゆる場合に大いにあるはずである。

宗派的な隊では大い隊付の聖職者があるから、隊長は宗教的訓育のあらゆる問題についてはその人と相談すべきである。宗教的訓育を目的として、“スカウト・OWN”(Scout's Own)という礼拝式又はクラスを開いてもよい。これは神を礼拝し、スカウトのおきてとちかいを一層深く認識するための、スカウトの集いのことであるが、正規の宗教儀式を代行するものでなく、あくまでも補助として行なうのである。

しかし、大多数の隊は、各自の家庭によって宗教の異なる少年たちが集まった、各宗教混合の隊である。この場合は、少年たちを各自の宗教の牧師なり僧侶なりの所にやって、それぞれの宗派の宗教訓育を受けさせなければならない。

貧困その他不遇の人たちの多い地域の隊にはほとんど何も宗教を持たない子供ばかりで、その親たちもこの点で助けにはならないことがある。従ってこういう場合には、小さい時から宗教的によく育てられて来た子供たちとは違った扱い方や訓育方法が必要である。

この点でもまたスカウティングは教職者に対して大いに助けとなるもので、既に非常によい成果を示して来ている。

スカウティングは次のような方法によってそういう助けになり得る——

- (a) 隊長個人が示す手本
- (b) 自然研究
- (c) 善行
- (d) 年長スカウト組織

(a) 隊長の手本——少年たちの目には大人が口にするよりもすることの方が疑いもなくずつと重大に映るものである。

それ故、隊長は正しい動機によって正しいことを行ない、そうすることを見せびらかすのではないけれど少年たちに示すようにする、という重大な責任を荷なっている。ここで、兄としての態度が教師のような態度よりずつと大きな力をもって物をいうことになるのである。

(b) 自然研究——自然観察の中に多くの説教を聞くことができる。例えば鳥の生態であるが、同じ種類の鳥はたとえ1万マイル距った場所のでも羽毛の並び方は同じで、その移住、巣ごもり、卵の色、ひな鳥の育ら方、母鳥のはぐみ方、食餌、飛翔力など——これらすべてが人間の力によらず、造物主(神)の定めたところに従って行なわれている——ということは少年たちにとって最良の説教ではないか。

季節に従って咲く花々、あらゆる種類の植物、その発芽や樹皮、いろいろの動物とその習慣や種類、さては宇宙にそれぞれの定められた場所と整然たる運行に従う日月星長——これらは無限無窮についての、また造物主の広大な計画とその中であって人間がいとも小さいものであることについての、最初の概念をすべての者に与えてくれる。これらはすべて少年たちを魅了する力を持ち、彼らの探求心と観察力を夢中にならせるほどに刺戟し、もし誰かが糸口をつけてやりさえすれば、この不思議の世界での神のわざを少年たちがじかに知ることができるようにしてやれる。

私が不思議でならないのは、どうして教師たちがこの容易で確かな教育の方法を無視して、活潑で元気いっぱいの子供に高尚なことについて考えさせる第一歩として、聖書の詰めこみをしようと苦勞するのだろうかということである。

(c) 善行——隊長の方からほんの少しばかり励ましを与えてやりさえすれば、毎日の善行は少年たちの間ですぐ流行のようになるもので、これは理屈だけでないほんとうのクリスチャン（訳者註・ここではキリスト教の場合をいっているが、何れの宗教でも実の宗教信仰者という意味にとればよい）に育てるための大へんよい手段である。子供というもの、実行の仕方がわかりさえすれば、善いことをしたいのは生まれつきの本能であるからこの日々の善行ということはその本能を充たし、発展させ、そうしている間に他人に対する慈善の心を持つようになる。

このように善に対する自分の意志を表現することは、神の教えを受身で会得するよりも、ずっと効果的で、少年にとって無理がなく、またスカウトのやり方としてずっと適切である。

(d) 年長スカウト組織——読み、書き、そろばんの基礎課程を受けはじめたかと思うと、やがて一般の少年は善良な働き人として、人生を踏み出す準備ができたものとして世の中に送り出される。学校を卒業してからも、自分で行きたかったり、又は一日の勤務のあとで通学することを親が希望したりすれば、立派な技術や補習学校があって、そこへ行くことができる。優秀な少年たちはこういう学校に入って磨きをかける。

しかし、その中で普通の少年たちや悪い子供たちはどうなっているのだろうか？彼らは足を踏み外すままに任ざれている——今までの学業を更に補修し、完了することが最も必要な時期に、これからの一生がどうなるか身体的にも精神的にもまた道義心においても転換期である大切な時期に、である。

スカウト運動が少年たちのために大いに貢献し得るのはこの所であって、このことのためにこそ年長スカウトを組織して、少年たちを引きとめておき、連絡を保ち、善に進むか悪に外れるかの岐路に立つ人生のこの時期に立つ彼らを、スカウト運動の最高の理想をもって鼓舞しようというわけである。

自 尊

少年たちが涵養すべき尊敬敬虔ということを語るにつけ、自分自身に対する敬虔つまり最高の形の自尊という重大なことを見落してはならない。

これもまた手ほどきの段階としては自然研究によって教えられる。植物、鳥類、貝類の解剖など、造物主の不思議なわざの一つとして見ることができる。次いで同じ見方で自分の身体を調べさせるとよい。骨格、皮膚、筋肉、神経、腱、血液の循環、呼吸、脳髓と運動の支配、これらのすべてが、細かい部分に至るまで幾億万の人間一様に同じでありながら、二人として顔も指紋も同じものはないのである。この不思議な人間の身体が神の手によって作られ、神の宿り場所として大切に、成長させて行くために自分に与えられたのだということを少年に考えさせるとよい。そしてこの身体は正義の観念、即ち高い道義心によって導かれれば、よい働きと勇敢な行為をすることのできる身体なのだということを。

このようにしてみずからを尊ぶ心が生れてくるのである。

これはいうまでもなく多くの言葉を費して説教し、その結果が現われるのをただ待っているというのではいけない。その子供を相手にするあらゆる場合に意図し、期待をもってかからなければならぬ。特に少年に責任を負わせてやること、自分の能力の及ぶかぎり最善をつくし義務(duty)を行ないぬく尊敬すべき人間として信頼してやること、また図に乗せないようにしながらも尊重と思いやりをもって扱ってやること、などによって自尊心を助長することができる。

忠 誠

神と人に対する敬虔に加えて、祖国に対する忠誠は特に重要である。

祖国に対する忠誠心は、国民の別々の考え方に均衡を与え、妥当な見解を持たせるために、最高の価値を持つものである。国旗に対する敬礼、国歌の奏楽歌唱の時の起立、その他いろいろな外面的表現も、忠誠心を助長するに役立つけれど、このような表現のもととなるべき真の精神を養うことがまず肝心である。

少年としては、みずからに忠誠——つまり自分の良心に対して忠誠——であることが自己認識への大きな一歩となる。他人に対する忠誠は、言葉よりもみずから表現し行動することによって明らかにされる。他人への奉仕と自己犠牲には、一朝外敵の侵略に対して祖国を守る必要が起った時には祖国のために赴くという覚悟が含められているのは当然である。これは国民一人一人の義務(duty)なのである。といって乱暴な喧嘩好きの精神を養おうというのでもなければ、兵役や戦争のために訓練しておこうという意味でもない。そういうことは、少年が自分で物事の判断を下せる年輩になるまでは心を煩わす必要はない。|| 健康と力



身体と四肢の運動を絶えずすることに興味を持たせよ

生涯を築き、人生を楽しむ上に、よい健康と身体の強さは計り知れぬ価値を持っている。わかりきったことである。教育の方からいうと、“本を勉強する”ことよりも価値があり、“人格”(性格)とほとんど同じに大切だとみてよい。

我々スカウト運動では、有用な社会人となるのに欠くことのできない健康と衛生についての訓練を、何ほどか少年たちに与える点で大いに尽すことができる。

我々の任務は少年たちに運動に関心を持たせ、同時に、体を痛めずにはげしい運動ができるようになるまでには、まず健康な身体をつくり上げなければならないのだということを教えてやることである。健康な身体は、適当な淡泊な食餌、清潔に関する衛生上の注意、鼻で呼吸すること、休息、衣服、規則正しい習慣、自制などといったことで得られる。しかし自分たちは病気にかかりやすいのかと思うなど、少年たちを内向的にしてはいけなく、その代り、健康を鍛えることを目的としてスポーツのできる身体を持たせなければいけない。

毎週の隊集合でわずか 30 分ばかりというのでは、正式の体育をすることは到底不可能であるけれど、それでも我々は、自分の健康には自分で責任を持つこと——即ち健康をいかに得るか、いかに保つかを少年に教えることはできるし、自分勝手の時間に実行しさえすれば身体を強くするのに役立つような運動の仕方を教えてやることもできる。また、いろいろな戸外の運動やゲームをただ楽しみのためばかりでなく、自分の一生を通じて健全に、強く、丈夫になるに役に立つのだということで、それに関心を持たせることもできる。

肉体の健康は神経や精神の健康にも関係がある。ここで我々のいう訓練は肉体の訓練と相結ぶわけである。

強 健 で あ れ !

理屈にかなった注意と理解をもってすれば健康で働ける人間になれるのに、そうしないために不健康でいる人の数はかなり多いという統計が出ている。学童の健康に関する報告によると、5人に1人の割合で成人してからの活動を妨げられるような欠陥を持っているということであるが——それらの欠陥とは、いいですか諸君、予防することができたはずのものである。

これらの統計報告は多分に挑戦的であり、同時に不足しているものと救済の手をうつべきことを示唆している。即ち、我々が手おくれにならぬうち手をうてば、年々幾千万の少年たちを、みじめな半人なみの生活を引きずって行く代りに強健な有用な人間にしてやることのできるというのである。

これは個々の人間としてばかりではない、国家的にも重大な問題である。

ごく一般的な立場から若い世代のための体育の向上について論じられているが、この方面に向って我々の仕事の道は大いに開かれている。

しかし私は、こういう世論の声によって、誤った方向に引ずられてはいけないということを、隊長諸君に警告を發しておきたい。

26頁に掲げた“社会人性育成のためのスカウト訓練計画分析表”によって、人格(性格)と肉体的な健康の二つがいかにまたなぜに我々スカウティングの主要な目的であるか、またこの二つのために我々がいかなる手段を尽すかは、既にご承知の通りである。

しかし、肉体の健康は必ずしも肉体のはげしい操練によって得られるものでないことを念頭において頂きたい。

軍隊の教練は周到に考案されたもので、軍隊の目的のためには立派なものである。成人男子の発達した筋肉組織に適し、このはげしい訓練のもとに兵隊たちは健康を非常に増進させる。

しかし、自然には得られないようなものを補充しようとの考えから工夫されているので、無理なことがよくある。

神は決して肉体の“飛躍”を棄出されなかった。ズール一族(記者註・南阿の一派の土人)の戦士たちは、戦士としてすばらしいものだが、スエーデン体操などしたこともない。普通の少年でも、フットボールをし、その間にトレーニングの運動をして健康を保っていた少年なら、引きつづき健康を増進するためにはげしい操練を必要としない。

戸外のゲーム、ハイキングとキャンピング、健康的な食餌、これに適当な休息が加われれば、自然な、無理のないやり方で少年たちを健康に強くしてやることのできるのである。

これに不賛成なものは誰一人あるまい。まことに簡単な理論である。けれど、実行となると幾つかの困難を解決しなければならぬことを発見する。

都会の、あるいは終日工場で働いている少年などが、広い野外に出てゲームをすることはむずかしい。野天で働くものや山村の少年は戸外で暮らすことが多いから、当然その機会に恵まれている。それでも彼らはいかにゲームを楽しむか、時としてはちゃんとした走り方も知らない!

ちゃんとした走り方のできる少年がどんなに少いか、それは全く驚くばかりである。

自然な、楽々とした軽い歩き方は、ランニングの練習によってのみ体得できる。この練習をしないと可哀そうに少年は、無作法者ののろまな重いド外々歩きか、都会者のセカセカした引ずり歩きかになってしまう(それに、人間の歩きぶりに何とその人柄が表わされることか!)

編成されたゲーム

スカウティングの目的の一つは、少年の健康と力を増進し、その人格(性格)を養うに役立つような、チームで行なうゲームや活動をさせることである。これらのゲームは面白く、競争的であるべきで、これによって勇気の本質ルールに従うこと、規律、自制、鋭敏さ、不屈さ、指導性、自分本位でないチーム精神などを仕込むことができる。

こういうゲームや練習の例をあげると、はしご、ロープ、木、岩などに登ること、肋木や平均台、二股の木の枝に杖をわたして跳び超えるハードル競争、視力を強くする“斑点だらけの顔”遊び(訳者証・この遊び、いかなるものか不明、機会を得て調べるつもり)、投球と捕球、ボクシング、相撲、水泳、ハイキング、縄とび、片足組打ち、リレーレース、闘鶏あそび、フォークダンス、動作入り歌や般歌を歌うこと、その他。こういうゲームやその他多くの活動が手はじめとなって班対抗のいろいろのプログラムが計画できるが、創意力に富む隊長なら、これらを順次応用して、必要な体力増進を計ることができたはずである。

このような活発なスカウトのゲームは、私の考えでは、体育の最もよいあり方だと思うが、そのわけは、これらの大部分は道徳教育にも役立つ上に、費用もかからないし、整備された運動場や器具などが無くてもできるからである。

ゲームや競技は、スカウト全部が参加できるように、及ぶ限りの手配をすることが必要である、というのは、我々は一人や二人の上手な者だけが活躍して、あとの者にはすることがないなどということは望まないからである。みんなが練習し、みんなが大体うまくなるべきである。班がそのままチームになるのだからゲームは主としてチーム試合になるように手配すべきである。優勝戦まで行くものが相当あるような競技では、決戦は勝者たちにさせる一般の方法をとらず、敗者たちでさせ、どのチームが最も優秀かというよりどのチームが最も悪いかということを見つかるのをゲームのたてまえとする。上手な者たちはどうしても賞をとろうとして最劣等にならないように一生懸命に努めるもので、前述したような競技の方法だと劣等の者に大いに練習をさせることになる。

スカウトにあって我々はどんな子供にでも——都会であろうと山村であろうと——いろいろのゲームをするにはどうしたらよいか、そしてどうしたら生活を楽しみ、同時に心も体も強くできるかを教えてやることのできるものである。

体 操

ゲームをする好い機会が得られなかったり、度々することができない場合に、体操は身体の発育のための集約的な方法であり、ゲームと併行してもよいのであるが、次のことに注意しなければならない——

1. 体操を全然教練のようにしてはいけない。それより少年各自がよく理解して、自分のためになるのだからというので自分から進んでやりたいと思うようなものにする。

2. 体操を教える者は、解剖学について多少の知識を持ち、多くの教練的動作が少年の未熟な身体に及ばず害について知っていること。“Scouting for Boys”に掲げておいた六種類の体操なら、解剖学その他の専門家でない隊長でも危険の心配なく教えられる。(この体操は——正しい動作と呼吸の仕方を覚えこんだら——自分の家で暇な時にスカウト各自にやらせるべきで、隊集会の常例の一つにすべきではない。)(前述六種類の体操についてはこの書記了後附録する)。

少年たちが不断に身体と四肢の運動をし、むずかしい動作をもやりこなせるようになるまで勇気と忍耐をもって練習することに、興味を持つようにするためには、我々はあらゆる手をつくさなければならない。

例えば“走高跳”、“三段跳”、“土嚢はこび”といったような簡単な運動について各隊で一定の基準をつくっておきスカウト各自が自分の能力を高め、前よりも高い基準に達しようと試みることができるようにするのは結構な仕組である。

次に、チームのユニフォームのようなものがあると、少年たちにとって一つの魅力になるし、運動方面でのエスプリ・ド・コール(団体精神)を向上させることにもなり、ひいては運動の前後に衣服をとりかえ、身体や手足を拭くこと——洗うこと——清潔ということを奨励することになる。

“いかにして健康を保つか”はやがて運動をする少年がみずから強い関心を持つ問題となり、自分自身身をつけること、栄養価、衛生、自製、禁酒、その他いろいろの尊い教訓を受け入れる土台となる。

少年各自に、自分は責任ある人間だ、だから自分の身体と健康に注意する責任があるのだということ、自分の身体を最もよく発達させることが神に対する義務(duty)の一つなのだということを感じさせよう。



教練を少年の身体を発達させるよい方法であるという、多くの人が弁護しているのをお聞きだろう。私は生涯を通じて教練の経験を持っているが、もし人々が1週1時間の教練は少年の体力と体格をよくすると考えているなら、失望すべき結果を見るであろう。

毎日毎日、月を追って、兵隊に課せられる教練は疑いもなく身体を非常に発達させる。しかし、教官たちは——いずれも熟練の専門家であるが——厳格な纪律のもとに生徒らを絶えまなく自分の監督下においているのだ。それでも時として間違いを仕出かし、心臓や過労その他の病気が起ることは成熟した男たちの間でも稀ではない。

その上、教練はすべて詰めこむ。少年の中に叩きこむことで、決して自分みずから学んで行くところの教育ではないのである。

スカウトに対する教練についていえば、私は今までにしばしば隊長に向ってこれを避けるように——つまり行過ぎはいけぬ——と注意しなければならなかった。若干の父兄たちからの軍国主義的反対を別として、二流どこの隊長たちだとスカウティングの高遠な目的(即ち、個々の少年から引き出すという)が理解できず、また理解したとしても教練についての独創性を持たないために、行進の時の見せかけのために少年たちを何かの形に整えようとの手近かな手段として教練をするから、だから教練は好まないといわれる。

同時に、隊長によってはその反対を行きすぎて、隊員たちにはっきりした纪律も身だしなみもなく、いつもだらしないままにしておくのがよくある。この方がもっと悪い。中庸が必要なのだ——よい身だしなみや態度、また勇気をふるい立たせ、男らしく隊の名誉のために身を持たそうとするようなチーム精神の源泉などについて、どんなことが必要なのか、ちょうどよい加減の指示は必要なのである。そのために時たまの教練は必要なのである。しかしそれにしても、もっと値うちのあるスカウト訓練を犠牲にして没頭するようなことがあってはならない。

少年たちに元気をつけ、彼らを羊のようではなく男らしく行動させるために我々がスカウティングで必要な教練といえば、隊集会のはじめ数分間の無音である教練か、“O’ Grady says”、というゲーム(記者註・最終頁参照)ぐらいである。教練を全然無視しようというのではないが、消火、荷車ひき、救命ボートに乗出す、架橋、その他の作業によって操練する方がずっと望ましい。これらは何れも身だしなみと活動と纪律とを等しく要するが、少年各自がチーム全体の成功のために自分の頭を使って物事をして行くということが肝心である。更にこれらを競争することは、見る人たちにとっても最も興味あるものであろう。これがまた士気とフェア・プレイの精神を育てることを含んでいるのである。

自分のチームが敗けた時、嫉みを抱いたり、審判の不公平や相手の戦術を鳴らしたり決してしないことこそ旨とすべきであり、どんなに落胆しようとも相手に対して心地よい賞讃をこそ示すべきである。これこそ真の自律と無私を意味し、偏見を打破るためになくてはならぬ善意をあたりに振りまくことになる。

私はある非常に精鋭な連隊を知っているが、その新兵は極く少ししか教練を受けない。彼らはいかにすべきかを教えられると、あとは自分で常習的にできるようになり次第、古参兵と同じに外出したり自分の楽しみや軍務をしたりしてよろしいといわれる。軍隊で拳止動作を何カ月もかかって詰めこまれる代りに、みずから身につけるのは“かかって彼ら自身による”のだというのである。そういうわけで彼らは自分から教練し、互に教練し合って普通の半分の期間で新兵の域を卒業してしまっただけである。そういうわけで彼らは自分から教練し、互に教練し合って普通の半分の期間で新兵の域を卒業してしまっただけである。

ここでも教育と詰めこみは違うのだ！ 覇気と責任を兵隊たちに持たせることによって、この成果を見たのである。諸君もこれと全く同じやり方で少年たちの身体を発達させることができると思う。

けれども、結局は、自然の中でのゲーム、新鮮な外気、健康な食餌、適当な休息の方が体操や軍隊的教練をどれだけ多くするよりも、発育のよい健康な少年をつくることのできるものである。

戸 外

牡牛を強くするには酸素を——私はかつてあるスカウト隊がその集会所で実に見事な教練をやったのを見たことがある。

それはそう快で立派なものだったが、ああ何たることか、空気はそうでなかった！ ごく控え目についても“鼻でやつと息ができる”ようだった。通気が全くないのである。少年たちは機関車のように活用していたけれど、実際は血行をよくする代りに毒気を吸いこんで、折角の活動を台なしにしているのだった。

運動をして効果をあげるその半分は新鮮な空気のおかげで、空気は鼻を通してと同様、都合よくも皮膚からも吸いこまれる。

全く——戸外こそ成功の秘訣である。スカウティングはそのためにこそ——できる限り戸外生活の習慣をつけるためにこそ、存在するのである。

ある大きな都会の隊長に、土曜日のハイイクをどんな風にやっているか、公園へでも行くのか、郊外へ出かけるのか、と聞いたことがあった。

彼はそのどれもしないと答えた。なぜ？ 隊員たちが望まないから。少年たちは土曜日の午後になると集会室に来ていたいのだという。

可哀そうな奴ら、隊集会室に来る方が好きだというのも尤もな話だ。彼らは屋内にいることに馴らされている。しかし、こんなことをスカウトにさせまいというのが我々の仕事で——我々の目的は彼らを屋内から連れ出して戸外生活を好きにならせようというのである。

小アレキサンドル・デューマ（註・“三銃士”や“モンテクリスト伯爵”を書いたデューマの息子、“椿姫”で有名なフランスの小説家）がこんなことを書いている——”もし私がフランス国王であつたら、12歳以下の子供は誰も都会へ来させないことにしよう。12歳になるまでは野外で——日の光を浴び、野で、森で、犬や馬を友にして、身体を強くし、理解のための知恵を授けてくれ、魂に歌を与え、世界中の教科書を集めたよりもっと教育のために役立つ好奇心というもののかき立ててくれる大自然と、顔つき合せて生活させることにしよう。

“子供たちは夜の沈黙もまた夜の物音も理解するようになるだろうし、最高の宗教——神御自身がその日毎のわざに示される輝かしい光景の中に啓示し給う——を持つてであろう。

“こうして12歳になった暁には、強健で、高尚な心と深い理解をもって、その時にこそ彼らに与えてもよい組織的な教育を受けだけの能力をそなえ、しかもその教育を4年か5年でやすやすと卒業できるに違いない。

“フランスにとっては幸だったろうが、子供たちにとっては不幸にも、私は国王ではなかった。

“私にできることといえば、こういう忠告をし、一つの方法を提案するだけである。その方法とは——子供の生涯の第一歩として、まず体育をせよ、である。

スカウトにあつては特に、もし我々固有の長所を守ろうとするなら、どうしてもこの方向にしっかり向わなければならない。

戶外生活はスカウティングの真の目的であり、成功の鍵である。しかしあまりにも都市生活がしみこんでいるので、我々はこの目的を軽視し、形式に戻りがちである。

我々はクラブではない——日曜学校でもない——我々は森の教場である。我々は、精神のため身体のためであることを問わず、スカウトと隊長の健康のために、もっと戶外へ出て行かねばならない。

キャンプはスカウティングで少年たちが一番待望することで、隊長にとっては絶好の機会である。

野外生活と大自然の味わいにより、即席の料理法、山野を駆けまわつてのゲーム、追跡、道さがし、開拓、少々の苦勞、キャンプ・ファイアを囲んで歌を歌うことなどにより、キャンプは間違いなく必ずどの少年の心をも捉える。

我々は空地、スカウトたちが自由に行けるような我々自身の土地、できることならキャンプ用にずっと使える土地がほしい。スカウト運動が発展するにつれて、スカウティングの各中心地ではこのようなキャンプ地を当然の設備として持つようにすべきである。

以上のような大きな目的に貢献するほか、常設のキャンプ地にはもう一つ役に立つことがある。指導者たちの訓練場として、キャンプ工作や自然研究の勉強をし、何ものにもまして野外生活の精神——森林生活における兄弟精神を感得する場所とすることができる。

今まで何年かの間にこういうキャンプ地が手に入り、スカウターのための訓練場として、スカウトのためのキャンプ場として使われている。このような常設キャンプ地はキャンプ生活についてその価値をよく証明して来ているが、都市の周辺にある土地が建物の建築用地として誰かにみな買い取られてしまわないうちに、我々はキャンプ地としてもっともっとほしいのだ。

私は“キャンプ生活”という言葉を用いた。“キャンプ生活”は“テントの中で暮らす”こととは違うのだということを、しっかりと念頭において頂きたい。

少し前のこと、私はある模範的な学校キャンプを見せられたが、そこではキッチンと張ったテントが幾列もズラリと整列し、大きな立派な食堂用テントや設備の整った料理人たちの一廓もあった。レンガをしきつめた小路もあれば、木造建の浴場も便所もあった。すべてよく設計され、建築屋に建てさせたのである。このキャンプを開設した人はただある金額を払っただけで、このすべてができあがった。全く簡単でテキパキしたものである。

私の唯一の不満は、これはキャンピングではないということだつた。テントの中で暮らすのとキャンピングとは非常に違ったことなのである。いわば、すっかりお膳立てをしてもらえる群衆の1人としてなら、どんな馬鹿でもテントの中で暮らすことはできる。しかし、そこで彼のためになつたはずのことは、家へ帰ったらそれきりである。

スカウティングにおいては、少年たちに魅力があり、同時に一つの教育ともなる——つまり、前もってテントをつくったり、食べものの作り方を習ったりまでして、自分たちで設営する——これが真のキャンピングだということを我々はよく知っている。

これから、班ごとに別々の敷地や選定した一隅にテントを張ること、水や薪のこと浴場や野外台所や便所やごみ穴やその他の設備、キャンプ工作の応用、キャンプ用具や家具の製作などが、強い興味と計り知れぬ訓練とを与える。

テント町に大人数の少年を擁する場合は、集団生活を支えて行く手段として教練や特別の指示を行なわざるを得ないが、それに反して数班だけの場合は、キャンプそのものの作業に相当の時間をとられるが、そのほかに自然知識や、田舎を駆けまわったりハイクしたり、森林の中で戸外生活をしている間に心身の健康を増進するなど、間断ない教育の機会が得られる。



キャンプは隊訓練成功の要件である。しかしキャンプは忙しくあるべきで、目的もない遊びの場所であってはならない。

私の理想とするキャンプは、誰も彼もが機嫌よく忙しく、班はいかなる状況の下でもいつもの通りのありのまま、班長もスカウトもみんな自分のキャンプと自分の道具を心から自慢することができるような、こんなキャンプである。

小規模のキャンプだと隊長が示す手本によって非常に大きな成果があげられる。君は自分の隊員にまじって生活している。そして彼らから注目され、知らず知らずに模倣され、しかも恐らく君自身はそれに気がつかないだろう。

もし君が怠ければ彼らも怠けるし、もし君が清潔好きなら彼らもそうだろう。またもし君がキャンプ用の小道具をあれこれ工夫するのが巧みだと、彼らも競争で小道具発明家になろう、というものである。

しかし、少年たちにさせるべきことに隊長が手を出しすぎではいけない——“何かやらせたい時は自分でするな”とはよい言葉である。

我々はほんとうに健康で清潔なキャンプを望むばかりでなく、少年たちがそこで森林生活者の生活にできるだけ近づき、冒険を試みることができるようなキャンプを望むのである。

水泳・漕艇・信号

水泳——身体を鍛えるためのいろいろの方法の中で水泳には次のような利点がある——

少年たちは水泳が好きで、熱心に習いたがる。

清潔を好むようになる。

泳法を覚えるうちに勇敢になる。

熟練するに従って自信を得る。

胸部と呼吸器を発達させる。

筋肉を発達させる。

人命救助の力をつけ、実行の機会を求めようになる。

漕艇——もまた筋肉を発達させるのに非常によく、スカウトにとって大きな魅力を持つ。ボートは水泳の能力が認められたものだけに限定すべきで、そうすると多くの少年たちを水泳訓練の方に誘うことになる。

信号——信号の訓練は知能的な訓練である一方、何時間も身体を屈折し、腕を動かし、視力を訓練することによってよい運動にもなる。しかし、これは何の役にも立たず、目的もなければ冒険物語も生まれない屋内での信号練習に墮落しないように、戸外で練習されるべきである。

個人衛生 清 潔

清潔は身体の内外ともに健康にとっての第一条件である。

入浴ができない場合、地の粗い濡れタオルで身体を摩擦することを、少年たちの習慣となるように教えるのは非常に大切なことである。また食事の前や用便のあとで手を洗う習慣も同様である。隅から隅まで清潔でなければならないということは、ハエとりの実行から教えることができる。ハエとりはスカウトたちにできる有益な公共奉仕としてばかりでなく、ハエの足で運ばれ、しかも人間を害するほどの影響を持つ微細な病菌について教えることにもなる。

食 物

食物は成長ざかりの子供については重大な考慮を払うべき問題であるが、それでも親たちの側がこの問題に関して大いに無知で、従ってその子供たちも同様のありさまであり、隊長が食物のことについて多少心得ていることは、隊員たちの精力と健康のために——特にキャンプにおいては——役に立つ。

量についていえば、13歳から15歳ぐらいまでの子供は大人の量の8割程度が必要であるが、気ままにさせておけば15割ぐらいは大喜びで食べこむだろう。

節 制

控え目に食べることは、大人が飲酒を控え目にすべきとほとんど同じほど、少年に必要なことである。量においても種類においても、食慾を抑えることは自製のよい修業になる——種類の如何を問わず食べものを詰めこむとなったら、子供たちの能力は一体どこまであるか見抜ける人はまずあるまい。食慾を抑えてやるのは、運動のために身体を適合させるためである。

このように節制は、訓練上精神的にも肉体的にも注意すべきことになるわけである。

制 慾

少年を教育するすべてのことの中で、最もむずかしく、また最も重要なことの一つは性衛生である。身体と精神と心、健康と道徳心と人格(性格)、これらすべてが性の問題と関連している。隊長は個々の場合の個の性質に応じてうまく扱わなければならない。この問題は教育の権威者たちによってもまだ充分な注目が講じられていない。しかしこれは少女に対してはまだしも、少年の教育においては見逃がし難い問題である。親たちや世間一般に取り除かなければならない偏見や上品ぶるなどという大きな障壁があるが、それに気がつけて上手に扱う必要がある。もちろん自分の子供たちに適当な教えを与えるようにするのは、ほんとは両親の義務なのであるが、その大部分はなにかと理由をつけてその責任を回避する。こういう怠慢は犯罪に近いというべきである。

アレン・ワォーナー博士は次のように述べている――

“こういう教えは悪い習慣を誘うからと今までによく心配されて来たが、この心配が尤もだという事実はない代り、この問題についての無知が多くの人の一生を精神的肉体的に破滅させていることは事実が証明している。”

全くその通りで、私は兵隊やその他の青年たちとの相当広い経験からこのことを証明することができる。今、はびこっている表面に現われていない不道德の基たしさは実に重大である。



清潔であるのは男らしいことなのだということを少年たちにわからせよう。健康な活動でいつも忙しうさせておく――これが彼らにみだらな思いや不潔な習慣をけとばさせる最上の方法である。

この問題が少年と大人との間でタブーになっているという事実は寒心すべきで大方その結果は誰か他の少年から最も邪悪な形で教えられるということになる。

“少年の知っておくべきこと”という本の中で、フィールド、ジャクソン両博士は次のように述べている――“少年の性方面での発達は緩慢のものであるから、年少のうちに性的悪習がはじまり、しかも絶えず行なわれているのは悲しむべきことである。もし“予め警戒するは予め備うるに等し”という格言が安全を保証するものなら、思春期の危機は目前に迫っているのであるから、少年たちにどんなことが起るのか話しておくべきで、決して何も知らぬままで思春期に至らせてはならない。”

結局ここで隊長は大きな分野を持つ。まずはじめに隊長は、ある1人の少年にこの問題について隊長から話してやることをその少年の父親が反対しないかどうか、はつきり確かめておくべきである。またその少年をよく知っている人たち――牧師、医者、学校の先生など――に相談したり、その少年のためにほんとうの助けになってやれるためには自分自身に十分な経験と知識と人格がなければならないのだと認識したりすることも役に立つだろう。

そこで隊長はその少年と兄弟のつもりで、彼に忠告してやる他のいろいろの事柄の中の一つとして、事務的にこの問題に入って行くのが一番よいだろう。こうしたことに今までぶつかったことのない隊長たちにとっては、非常にむずかしいことのように思われるに違いない。実際に当たってみると豆のさやを取るように容易である。しかもその価値たるや、どんなに大きくいってもいいすぎではない。

前おきとして植物や魚類や動物がいかに生殖するかを説明するのはさておき、私個人としては、私自身はじめて聞かされた時そうだったように、男の子は誰でも自分から生まれてくる次の子供の胚種をめぐりめぐりの中で育てているのだよ、と話してやる方がずっとよいのだということを私は知っている。その胚種は何代も前から父親から息子へと伝えられて来ているのだということを。彼はそれは神から預っているのだ。だから結婚して、次の子供を生むために自分の妻に渡すまで、大切にするのが務めである。それを忘れて、とかくするうちに失くしてしまってはならない。そうさせるような誘惑がいろいろの形で手を伸ばすだろうけれど、しっかりして守らなければいけない。

それぞれの少年がそれぞれの時期に、この問題についてそれぞれ違った取扱い方を必要とする。第一に隊長が少年の全面的な信頼を得、その子に対して兄としての関係――つまり両方が心を打明けて話し合う間柄になることが一

番大切である。

同時に、若い、経験の少ない隊長たちに、私から一言警告しておきたい。隊長の年齢が少年と近いということは必ずしも有利ではない。ハンディキャップとなることが多く、時として全く危険でさえある。私が以前この問題について書いたことから、隊員各人に対してこの問題の解明をしてやることは隊長のすべき義務であると、私が考えているかのような印象を一般に与えてしまった。私のつもりは断じてそうではなかった。そんなことをしたら家族制度の組織全体をメチャメチャにしてしまう。私がしたいと思ったことは、この問題に隊長たちの注意を向け、自分の隊のスカウトが適当な時期に適当な人から指導を受けるように気をつけてやるようお願いする、ということである。その適当な人というのは、多くの場合、父親、牧師、医者などであって——隊長ではない。

喫煙しないこと

かつてある人“Scouting for Boys”の改訂版を書いて、その中で“スカウトは絶対に喫煙すべからず”と命じていた。少年たちに何々すべからずと命ずるのは一般に危険が多い——命令に反してたちまち彼らにひそかな冒険をさせることになるのである。

そのことに対して忠告するとか、卑しむべきこと、馬鹿げたことだといってよく説明してやるとすれば、彼らも遠ざけるであろう。これはワイ談、トバク、喫煙、その他の若い時にありがちな間違いに対しても同じことだと思う。

こういうことを、他の奴らの前にシヤレたように見せかけようとするなんて子供じみたことさ、と、けなしつけてしまうところまで、隊の中によい気風と意見が強まるのがよいのである。

綱わたり

自律と健康を養うために何とおかしな方法だろうと、ある読者には思われるかもしれない。しかし、経験からいうと有効だ、ということがわかっている。軍隊の体操場で、床から数尺の高さに渡した板の上を歩く練習をさせるのを見たことがあろう。この危っかしい試みに全神経を集中させることによって、自分の身体と神経とをしっかり支配する力が得られることがわかった。更に実験を進めてみると、たとえば、ある兵士が射撃練習でうまく行かなかった場合、この“平均台歩き”を少しすると自制と集中力を取戻すことができる、ということもわかったのである。

これは少年たちに魅力がある。スカウト杖（註・鼻に屈くほどの高さの頑丈な棒に目盛をしておき、川の深さを測る、溝を飛び越える、担架をつくる、群衆を抑える、暗やみのハイクに手びぎにする、旗竿にど使う、なのことに用いる。日本のスカウティングでは現在採用していない）を数本たばねて両手に捧げてすると、平均台をはじめて試みる時に平均をとる力を増すことができる。

既に前に述べたように、こういう運動は人格（性格）養成にも関連があるもので、すべてに先んじて“安全第一”を唱える現代の傾向を私が慨嘆する理由の一つである。ある程度の危険をおかすことは人生に必要であり、危険に対するある程度の訓練は生命を延長するために必要である。スカウトは人生のいろいろな困難や危険に立ら向うために備えておくべきである。それゆえ、我々はスカウト訓練を軟弱にしておきたくないのである。

身体不自由見スカウト

スカウティングによって今までになかった健康と幸福と希望を得ている肢体不自由、聾啞、あるいは目のみえない少

年たちが多数にある。これら少年の多くは普通のスカウト考査を受けることはできないから、特殊の、あるいは代りになる考査(註・進級及び技能章の)を受けさせている。

これら少年の多くは決して扱いやすいものではなく、普通の少年に対するよりはるかに忍耐と個別の世話を要する。しかしその結果をみるとするだけの価値がある。少年たちのためになり、その彼らを通して施設のためになることを賞讃する医者、保母、看護婦、教師たち——この人たちの大部分はスカウトではない——の声は圧倒的である。

こういう少年たちで感嘆することは、彼らの朗らかさと、スカウティングで自分たちのできる限りをしようとする熱心さである。彼らはどうしても必要な以上の特殊の考査や扱いをしてほしくないのである。彼らを全世界にわたる世界団体に加わせ、何かすることと楽しみ待つものを与え、彼らもいろいろなことを——しかもむずかしいことも——自分でなし得るのだということを自分にも他人にも示すことのできる機会を与えることによって、スカウティングは彼らを助けるのである。

III 工作と熟練



卒先して行なう少年は職業にも抜てきされる

今までもそうであったが、今日でも人的資材の恐るべき浪費をしている。これは主として効果的でない訓練をしていることが原因になっている。大多数一般少年たちは、働くことを好きになるように教えられていない。工作や実務について教えられる時でも、生涯の仕事とするためにそれらをかかんに応用したらよいかを示されることはめつたにないし、大望の火を燃え立たせられることもない。四角の釘がまるい穴の中に打込まれようとする場合が多すぎる。

果してどこに欠陥があるのか、はっきりいえる人はいないけれど、事実そうなのである。その結果、よい訓練を受けられない少年たちは、自然に横道へ外れ、ノラクラ者になってしまう。自分自身としても不幸であるばかりか、国家にとって重荷——時としては危険にさえなる。何かちよつとしたできばえでも示すことのできるような少年たちなら、もっと実際的な方法で訓練を与えれば、彼らの大部分は必ずもっとよくなるはずである。

我々はボーイスカウトで、今いったような欠陥を補うことができる。我々は、最も劣等な子供にさえ、人生のキツカケと足がかりを——少なくとも希望と工作の腕を身につけさせることによって——与えるように方法を講じることができる。

では、どのようにしてできるか？当然、誰の考えも工作関係のいろいろの技能章というものに向けられるであろう。我々は“工作”というけれど、実はその工作たるや、我々のテストの標準からいうと、“道楽”(Hobbies)の域をあまり出していないのである。しかし、これは些少な容易な初歩から少年たちを導いて行こうという、我々の方針の一つなのであるが、この道楽のように見える工作が、年長スカウトに至ってもっと専門化され、職業訓練となるのである。同時に道楽は

道楽としての価値があるもので、子供たちは手先と頭を使い、仕事をする事の喜びを感じる。ある子供にとってはこれが生涯の道楽となり、ある子供にとっては生涯の職業として技能者となるキッカケになるかもしれない。何れにしても、後日ノラクラ者になるとは思われない。道楽は悪魔のいたずらに対する一つの解毒剤である。

しかし、道楽あるいはいいかえれば工作は、ある程度の精神的内容が伴わなければ、少年の身についたものとしてはなれないのである。つまり、技能者というものは鍛錬が必要なのである。雇主や同僚の求めるものに自分を適合させなければならないし、まじめで、有能で、進んで物事をするようであればならない。

根気も充分になければならないが、これは本人がどれだけ大望を抱いているか、熟練しているか、健康であるかによる。

さてそれでは、我々はボーイスカウトの訓練にこれらをどのように当てはめればよいのだろうか？

まづ開拓作業

スカウトに工作の興味を持たせる第一歩は、小屋作り、伐木、架橋、鍋かけや皿おきなどの即席キャンプ用具作り、テント作成、キャンプ式織機でムシロ作り、その他いろいろのことを実地にするキャンプで、最も容易に効果をあげることができる。こういう仕事がキャンピング・シーズンを快適に過ごすために実用的で役に立つのだ、ということを少年たちはわかるのである。

こういうことに一度取っついてしまうと、冬の夜なべの道楽仕事にするほど熱心になり、その技術は各種の技能章となり、その熟練したできばえは金にもなろうというものである。このようにして少年たちはやがて熱心で根気強い働き人になって行く。

技能章

各種の技能章は、個々の少年に道楽というか工作というかに対する趣味を培わせ、その中のどれかが生涯の仕事となって、希望も頼りにするものもなしに社会に出て行かなくてもすむかもしれない、との見地から設定されている。

技能章は、子供に何か道楽とも仕事ともいえるものに手をつけさせ、そのことでかなりの進歩をさせるための、単に一つの励ましであり、外部の人々に対してはその子供が何か手に進歩に向っていることを示すしなのであって、その子供がテストに通ったその技能において大家になったという意味を表すためでは決してない。もし我々がスカウティングを、本職の腕前をあげるような仕込み方をする正規の課程にしてしまったら、スカウト訓練全体としての意義も価値も失われるし、その道の専門家でもないものが学校の職務を侵すということにもなる。

我々はすべての少年たちに、自分から進んで自分を楽しく伸ばして行かせたいのであって、外部から型にはまった教示を押しつけたくないのである。

しかしスカウティングに於ける技能章制度の目的は、隊長に一つの道具を提供することにもなるのであって、この技能章制度という道具を使って、あらゆる少年、いかなる少年にも、人格(性格)を形づくり、技能を伸ばすために役立つ道楽(Hobbies)を手がけるようにさせられる。

技能章制度は、もし理解と同情をもって適用しさえすれば、早々に追い抜かれ人生の競争に取り残されてしまうような最も愚鈍な内気極まる子供にでも、希望と野心を持たせられるように工夫されたものである。こういうわけだからこそ、技能の標準の点はわざとぼかしてある。技能章獲得について我々が標準とするのは、ある知識や技術において一定水準まで熟達するというのではなくて、そうした知識や技術を得るためにその少年がどんなに努力したかという点において

いるのである。このことが、見込みのないような子供の場合でも、もつと聡明なよくできる仲間に伍して同等のことができるのだという、足がかりを持たせることになる。

心ある隊長は、自分の隊員たちの心理動向に意を用いるから、のろまな子でも明敏な仲間と肩を並べてやって行けるように、その子に励みになるようなハンディをつけてやることができる。そこで、度々失敗したために劣等感を持ってしまった内気な少年も、自分にやりやすくしてもらって一度でも二度でも成功することができると、今度は自分で一層努力するようになる。もしその子が努力家であるならば、どんなに不器用であろうとも、審査員は技能章を与えるべきで、こうすると大いその子は励みを感じて、もつと技能章を得るように努力を続け、普通に能力のある者になる。

技能章の審査は競争試験ではない。個々の少年に対するただの審査である。であるから隊長と審査員は、各個の場合をその真価によって判断し、寛大にすべきところと厳重にすべきところを区別しながら、互に緊密な歩調を合わせてしなければならない。

スカウトが一つの技能章を得るには、その技能において一流の腕前になっているべきだ、と主張する傾きの人がある。理屈からいえば、たしかに正しい。こうすれば相当熟達した少年を数人つくることができるだろう。しかし、我々の目的はすべての少年たちに興味を持たせたいというのにある。まず手はじめに隊員たちに容易な障害物をやらせてみる隊長なら、少年たちが自信をもって熱心に跳び越えることに気がつくだろうが、もし反対にそそり立つ石垣を押しつけたら、少年たちは全然跳び越えてみようもしないで尻ごみするばかりだ。

同時に、いろいろの課目について少しばかり知識をもったからといって技能章を安売りせんばかりの極端なのは困る。そこが主要な目的を外さずに、審査員が常識と手心とを使うべき点なのである。

技能章かせぎばかりが技能章取得者になる危険がいつもある。我々の目的は、すべての少年をニコニコした、考え深い、自己を没却して、コツコツと働く国民に仕立てることで、見かけのよい自分勝手な少年にすることではない。隊長は技能章かせぎに気をつけ、どれが技能章かせぎ虫で、どれが熱心で真面目な勤勉家なのかを見分けるのに油断をしてはいけない。

こういうわけで技能章制度が効果をあげるかどうかは、隊長そのものの如何と、隊長として技能章制度をいかに扱うかその扱い方に大いによるのである。

知 識

観察と推理はすべての知識の基礎である。それ故、観察と推理の力が若い人々にとってどれほど大切であるか、決して見逃がすことはできない。小さい子供たちは観察力が鋭いといわれるが、それが成長するに従って鈍くなるのは、はじめてぶつかる経験には注意をひかれるけれど、それが繰返されると注意をしなくなるからである。

観察力とは、訓練によって身につけられるべき習慣である。追跡はその習慣を得るための面白い方法の一つである。推理とは、物事を結果からみて推論し、観察したいろいろの点からそこに潜む意味を抜き出す技術である。

観察と推理が一旦習慣として身につくと、その少年の人格(性格)を形成する大きな一歩が踏み出されたといつてよい。

これで追跡や追跡ゲームの価値は容易にわかったはずである。戸外での追跡についての話、集会室の中での追跡、これらをどこの隊でも大いにやってもらいたい。

少年の一般的な知識や気転は、地図を頼りに道を探したり、道標に注意したり、高さや距離を目測したり、シャーロック・ホームズの探偵ばなしを再演して、人間や牛馬や乗物の細部を注意したり報告したり、その他いろいろのスカウト活動によって相当磨かれるものである。信号は機智を鋭くし、視力を発達させ、研究心と集中力を高める。救急法の

勉強にも同じような教育的価値がある。

寒い冬の夜だとか、雨の日は、隊長がその日の新聞の主な記事を地図やその他を使って解説するなどを使うと有効である。その土地の歴史に取材した劇やページェント(野外劇あるいは見せもののこと)を構成出演することも、少年たちに研究させ、自意識を去って自己を表現させるのに、非常によい方法である。

自己表現

スカウトの芸術技能章は、絵かきになろうとか、その真似をしようとかいうのでなしに、自分たちの観察したり想像したりしたものを絵に描いて自分自身を表現するように、少年たちを導いて行こうという意図のものである。どんな粗雑なものでもかまわない。絵を描くことを奨励すると、子供の方では色や形の美しさに心を向け、むさくしい所にも光と影があり、色彩と美しさがあることに気がつくようになる。それから、心の中に撮す写真術——つまりある場面とか出来事とか人間とかを詳細にわたって注意し、心の中に定着させ、それを今度は紙上に再現する——こういうことを練習させると、更に進んだ教育の段階に入ることができる。

これは観察の最高段階である。私自身発見したことだが、この高度の観察力は練習すればかなり発達させることができる。

リズムは芸術の形式の一つであるが、それが詩や音楽に用いられる場合であろうと、からだの運動の場合であろうと、そういうたしなみのない者の心にもリズムは自然に生まれてくる。リズムは安定と秩序を与えるもの——で、最も自然に近いもの野蛮人たちにさえ否彼らには特に自然な感動を与える。音楽の形をとる場合のリズムは、いうまでもなく明々白である。四千人、五千人のズール一族土人兵が高唱する時の戦いの歌こそは、リズムが音楽と詩と、からだの運動の中に渾然一体となったよい例であろう。

音楽を演ずることは人類共通の喜びである。言葉に音楽が伴う歌は、それは適切に作曲されていれば、人の心そのものに表現を与えて、歌う人にも聞くものにも喜びをもたらす。

音楽を好む天性を活用すれば、自然にたやすく少年の心を詩と高尚な情感に結びつけることができる。これは少年に幸福を教え、同時に彼らの思想を高めるために、隊長にとって手取りばやい手段となる。

劇を演ずることも、自己表現の教育の一部を荷うはずである。

学校時代私はつい今演劇をやらせられたが、そのことを私は幸運だったと思っている。それは一つには長せりふを暗記する練習になったこと、また大勢の人の前であがらないで、はっきり物をいう習慣がつけられたこと、それからしばらくにもせよ誰か自分以外の人物になっているという珍しい喜びを与えられたからである。



唱歌と演劇は自己表現の訓練にこの上なしだ。また一人残らず自分だけが喝采されようというのではなく、全体が成功するために、自分の役割を覚え、上手にやろうとするから、よいチーム・ワークということにもなる

シェークスピアや他の戯曲家の作品の美しさを教えられ、それを表現する間に、喜びと悲しみ、愛と同情を感じることができた。

その上、人々が必要とする折々に、その人々に喜びを与える喜びと幸福とが得られた。

冬の間、大ていの隊で演芸などを催すが、こうした隊資金の足しまえを儲けるばかりか、隊員たちにもよい訓練になり、他人をも喜ばせている。

道楽仕事から始まって一生の仕事へ

いろいろの道楽、工作、知識、健康、これらは仕事の成功に欠くことのできない勤労を愛する心と持久力とを養うための第一歩である。その次は、若い人々をそれぞれに適応した仕事にあてはめることである。

優秀な勤労者は、幸福この上ない人々のように、自分たちの仕事のある種のゲームのように考える—— 一生懸命にすればするほど、それが楽しくなる。H・G・ウェルズがこんなことをいつている。

“いわゆる偉い人というのは、その心根がいかに少年なのだということに私は気がついた。つまり、彼らは自分の仕事の楽しみに夢中になるという点で全く子供なのである。彼らは働くのが好きでたまらないから働く、だから彼らにとって仕事はゲームなのである。子供らしさというものは人間を育てるものであるばかりか、それこそ人間らしいものであり、決して消えるものでもない。”

ラルフ・パーレットも、“遊びとは物事をしたがることであり、仕事とは物事をしなければならぬことである”といみじくもいつている。

スカウティングでは、少年たちが各自に興味があるものに自分で一生懸命になるようにしてやって、今いったような仕事に対する態度を身につけさせようというのであるが、これが彼らの将来に役立つのである。

このことを我々はまず第一に、スカウティングの面白さ、楽しさを通じてするわけである。そこで少年たちは、順次に進歩する段階を経て自然に、気がつかないうちに、将来のために自分から成長して行く。

隊長の担任

スカウティングによって少年が生涯の仕事について実際的な備えをして行くことができる、という話はこれくらいにしておこう。

しかし、以上は少年に与える唯の準備にすぎない。少年の生涯の仕事となるものが立派なものになるよう、更に助けをやるために、隊長が力を出すべき範囲はまだまだあるのである。

第一に、その少年がスカウトとして習得した一通りのことを、もつと完成させることのできる方法を示して、例えば単に手すざびだったものを工芸にまで発展させることができる。どこへ行ったらもつと上の技術を習うことができるか、どのようにしたら奨学金とか見習の口が得られるか、ある特定の職業のためにはどんな準備をすべきか、貯金を何に使ったらよいか、求職にはどうしたらよいか、その他のこうしたことを隊長は教えてやれるはずである。

第二に、隊長自身で各種の職業紹介所やその利用法、各種職業の任務などを知っておいて、どんな仕事はその子に適しているか、その子が備えている資格について知っている立場から、貴重な忠告をしてやることができる。

これらはすべて、隊長みずからがよく気をつけて、こういうことについて知識を得ておくべきだ、ということなのである。隊長が自分で少しばかり面倒することによって隊の子供たち大ぜいの人生をよくしてやることのできるのだ。

たとえその子が使い走りの少年であっても、雇主からこんなよい子は他にないといわれるほど上手に使い走りをしさえすれば、昇進の道は開けているのだ、ということがわかったらどんなに励みになることだろう。しかし、気の進まないことや困

ったことに打負かされなくて、辛抱しなければいけない——もしそんなことで挫けるようだったら決して成功しないだろう。忍耐と頑ばりが勝を得る。“そつとそつと、おサルをお捕り”である。

職 業

隊長は隊員一人一人の個性と能力を注意し研究して、その子が最も適する職業をある程度見きわめることができる。しかし、さて職業を決定するのは両親と本人なのだということは心得ていなければならない。

そこで隊長のすべきことは、その子の親たちの相談相手をし、手近かな金銭的収入のために四角な釘である息子を丸い穴の職業に打込むことがないように、親たちに忠告をして上げることである。そして、その子の踏み出しが正しい軌道に乗っているという条件の下で、親たちにも本人たちにも将来の見込みに希望をもって進ませるべきである。

ここで重要なのは、将来に希望の持てる就職と、いわゆる“行きどまり”——というべき将来に昇進の望みのない仕事の区別をつけることである。後者のような職業は一時的には相当の金になることが多く、家族にとって毎週の収入が増すことになるから、その子が将来ほんとうの一人前の男子として就くべき仕事に対する見込みという点を考慮せずに、親たちによって決められてしまうことがよくある。

将来に期待を持てる仕事については、少年の能力に照らして慎重な選択が必要で、そのためにはその子がまだスカウトにいる間に充分準備してやることができるのである。将来のことを考えると、熟練を要する職種の方がそうでないのよりずっとよい。しかし、希望する職業に従うために必要な標準や規格を取得するため、時期を失わせることがないように考慮を充分払ってやらなければならない。



スカウトは積極的な善行者で、消極的な善良者ではない

IV 他人への奉仕

少年たちを男らしい、健康で幸福な、勤勉な社会人にしようがために、これまで我々が学んで来たスカウティングの特質は、少年各自を幸福にするために工夫されたもので、相当程度我が身本位のものだった。さて、ここで我々はスカウト訓練の第4部門——各自の視野をひろげ、他人に対して善行をする——という部分に入ることになろう。

自分本位

世界にはびこる悪徳とは何かと聞かれたら、それは——自分本位だ、と私は答えたい。諸君は一見これに賛成しないかもしれないが、よく調べて見たまえ。必ず私と同じ結論に達するに違いない。法律によって判定された多くの犯罪は、自分本位の我がまま、所有慾、失敗あるいは怨恨からの復讐に原因している。大ていの人々は貧しい者に食を与えるための寄附を喜んでし、人間としての勤めをしたことに満足するだろうが、それでもこういう目的のために貯えておこうと、自分自身が食べものや酒を切詰めようとはしない。

自分本位というものは、幾百幾千のちがった形で存在している。政党政治を例にとってみよう。明らかに二方面から考えられる一つの問題を、彼らは絶対的に一つの面しかない——つまり自分たちの考え方しかあり得ないと考え、他の面から見る人のことを嫌う。この結果は、いかにも聞えのよい名目の下に最大の犯罪を犯させることになるのである。これと同様に国と国との戦争も、自分の党派の利益にすっかり眩惑され、他党の立場を理解することができなくなったから起ったものである。ストライキや工場閉鎖(ストライキに対する)でも自分本位が拡大された結果から起ることが多い。多くの場合、真面目な勤労者がその努力に対して公平に言えば、この世の富の分け前にあずかるべきで、株主の利益の榨を確保しただけに永久の労役に縛りつけられるべきでない、ということが雇主側にわかっていないからである。一方、勤労者の方でも、資本がなければ大ぜいの働く仕事はない。また出資者が投資するについて当面する危険に報いる何らかの利益がなければ資本もあり得ない、ということに認識しなければいけない。

毎日の新聞で、あらゆる些細な苦情をも“新聞に書いてやるぞ”と向う見ずに飛び出す心の狭い人たちの投書を読むと、自分中心の見本がたくさん見られる。

こういった具合で、道路で遊んでいる子供たちに至るまでがそうである。自分が勝てないのが不満になった途端“もうやめよう!”と云いながら急にその場を去る。他の子供たちの興をそいでしまうことなど——自分の恨みが晴らされない限り——何とも思いもしない。

自分本位を根絶して——善行の習慣を

スカウティングの各面の実行は、少年を自分本位の狭い型から引き出すための実際的な方法として役立つ。一旦慈悲の心が生まれれば、自分本位という危険を克服しあるいは根絶する途上に既に出たものといってよい。

スカウトが入隊の時に約束するちかいの最初に“神に誠をつくし(To do my Duty to God)……”とある。“神に忠誠である”(To be loyal to God)とっていないことに注意して頂きたい。というのはこのいい方では単に心の状態を云っているに過ぎない。実証的積極的な態度であるところの——何ごとかをなすでなくてはならないのである。

ボーイスカウト運動の主たる方法は、消極的な概念よりむしろ実証的な訓練を何らかの形で与えることであるが、それは少年というものは考えるより行動したがるものだからである。それ故我々は、将来他人に対して善意を持ち、役に立つ人間になるための一つの下ごしらえとして、少年の日常生活の中に善行を実行させるのである。宗教がこの善行を裏づけとしていることは、いかなる宗派でも同様であり、その理由から我々は宗派の別に関わらないのである。

そこで少年が荷うべき“神に対して尽す誠”(神への duty)の一部とは、生きて行くために神から与えられた才能を、聖なる委託物として気をつけ伸ばして行くことだということが、もっとよくわかってくる。——身体は、健康と力と生殖力をもって神の御用に立つべきこと——精神は、驚くべき理性と記憶と認識をもって万物の霊長らしくあること——心は人の心の中にある神の片りん、即ち愛を、絶えずそれを表わし実行することによって、大きく強くすべきこと、ということがわかってくるというのである。



スカウティングは——神の紳士たるの精神によって、階級、宗教、国籍、民族の別を超越して行なわれる——世界団体である

このようにして我々は、神に対して誠をつくすということは、神の慈愛に頼るばかりでなく、他人に対する愛を実行に表わすことによって神の意志を行なうことなのだ、ということを少年たちに教えるのである。

スカウトが日々の善行による他人への奉仕の義務に向って欣然として立ち上ることは不思議なほどである。

この一見小さな土台（奉仕をするために自分の些細な便利や楽しみを犠牲にすること）の上に、他人のために己を犠牲にする人格（性格）が打立てられる。

スカウトの信念の一部をなす小さな日々の善行そのものの中に第一歩がある。自然研究や動物を可愛がることは心のやさしさを増しどの子供の中にも受け継がれているといわれている残忍性のかげら（私個人としてはこういわれているほど一般にそうだと信じないが）を制することができる。こういう小さな善行から進んで負傷者に対する救急法や救助法を学ぶようになりそれから自然に事故にあった場合の人命救助法を学ぶ方向に向うことになり他人に対する義務（duty）の観念と、危険に際して自分を犠牲とする心がけを養うのである。更にこれは、他人のため、我が家のため、祖国のために犠牲となる思想へと導き、そこから単に熱狂的に旗をふるよりもっと高尚な愛国心と忠誠にまで高められる。

地域社会への奉仕

奉仕の教えは単に理論上のことだけに止まらず、二つのはっきりした面から展開されなければならない——即ち、善意の精神を教えこむこと、それを実行に表わす機会を備えてやることである。

その教えは専ら手本を示すことにするが、隊長が物質的な報酬などを念頭におかず、ただそうすることをひたすら喜びとして、少年たちに尽す愛国的な献身によってこそ、正しいキツカケを与えることができる。

実行の機会、隊長から何か特別の奉仕の課題の案を出してやって、得させるとよい。いろいろの公共奉仕をすることは、社会に対する義務や愛国心や自己犠牲を行動に表わす点で、実地訓練のための最もよい道を開いてくれる。

平和な時でも戦争の時でも、祖国のために役に立つ骨の折れる任務をみずから進んでとるスカウトの働きは、善いことをするためには彼らがいかに熱心であり、よい目的のためとあらばみずから役立たんものといかに準備をととのえているのかを、よく証明するものである。この方向にこそ、社会人たるものの理想を実際的な方面に亘って伸ばして行くための強力な手段があるのである。

公共奉仕の具体的な一例をあげてみると町や村に対するボーイスカウトの救護・消火活動（非常奉仕活動）がある。

こういう奉仕活動は特に年長スカウトにふさわしく、公共奉仕の訓練にもなり、実行することにもなりながら、同時に年長の少年にとって強い魅力でもある。

はじめ隊で消火作業のための編成や装備をし訓練していても、更に進んで、近隣に起ることがありそうな各種の災害についても活動できるように備えるべきである——例えば、道路上の事故、ガス、薬品、その他の爆発、洪水や浸水、電気事故、鉄道事故、樹木や建物の倒壊、氷による事故、水泳及びボートの事故、飛行機墜落その他。

このことは、消火作業に必要な訓練や救護や応急手当のほかに、救出救護の方法や災害の種類に応じての応急手当に関する知識や練習を必要とする——即ち、ガス、薬品に関する知識、ボート操作、即製筏の作り方、救命網の使い方、救命具（浮袋）の使い方、水中人命救助、人工呼吸法、おびえている動物の扱い方、送電線の扱い方、可燃液体の扱い方、その他。

場合によっては、班ごとにするのが一番よいけれど、一般的には、各班が各種に亘って順次に訓練すれば、隊全体として完全に役立つこととなる。

しかし、ある災害に当てる編成は、救出班、救急班、弼次馬整理班、伝令班、その他いろいろに、特定の任務を各班に割当てべきである。

なすべき仕事をいろいろの種類に分けることは、少年が興味を持ってやれるようなすべての活動を与えることにする。災害を想定してしばしば動員訓練することは、能率と敏活を増すためにぜひ必要である。

みんなの能力が明らかになるに従い、世間一般の関心もおそらく有力なまでに高まるであろう。そうすると、こういう計画は、少年たちにとっては教育、社会にとっては幸福という、二重の価値を持つものとして認められるであろう。

将来にあがる成果

自己を抑え、他人に対する愛と奉仕をすることは、心の中の神を意味するもので、それは各人の心を全面的に変化させ、それに伴って真の神の国の栄光をもたらすことになる。

そして“私はこの人生で何をもらえるだろう”というのでなく“私はこの人生で何を与えることができるだろう”ということが少年の関心事になるようになる。

彼が到達する宗教の形がいかなるものであろうと、宗教の原理を自分でつかみ、それを実行することによって宗教の何たるかを知り、幅の広い仁愛の視野と兄弟たる人類に対する同情心を持った社会人として成長するに違いない。



人生の途上に遭遇する不幸にも人格と微笑の力をもって打勝つ

総括のことば

スカウティングの目的を一括めにしていうと、少年が物事に赤熱的に熱中する時期にその性格をつかみ来たって、それを正しい形に熔接し、その個性をカづけ、伸ばす——そこでその子が自今の祖国のために善良な人間、有用な国民となるようにみずからを磨いて行くように、ということである。

こうすることによって、我々は国のために心身両方の力をもたらすという奉公の一端を荷なりたいと願うものである。

しかし、国家的氣風を養うに当って、狭量になり、他国を警戒するようになる危儉が伴うのが常である。この危険を取除かぬ限り、我々が逃れようと懸命になっている非常な不幸を招くことになる。

幸いにもスカウト運動において我々は、世界のはとんどすべての文明国に組織されているスカウトの兄弟を持っているし、世界団体として確乎たる基礎も既に築いてある。この基礎の力は、共同の姉妹運動即ちガールガイド(ガールスカウト)の広大な発展によって補強されて行っている。

何れの国に於いてもスカウト訓練の目的は同じである、即ち他人に対する奉仕ができる能力をつけることであって、このような共通の目的をもっているから、共に奉仕する一つの国際的な世界団体として前進し、遠く手を伸ばして働くことができるのである。

少年の訓練に当って、世界市民が各自の祖国を単位として作りなすチームにおいて、その少年が有能なプレイヤーとなるように、精神、能力ともに伸ばしてやるのである。一国の場合も同じ原則に立って行動することにより、世界を一つとしたチームに於いて、その国が有能に働くことができるよう、正しい精神と能力を養うことに努力すべきである。

そうして、もし各人各国が各自の持場で働き、“ズルをしないで公明正大にやる”ならば、世界全体はいや更に繁榮し幸福になり、とにかくも久しく待ち望まれていた状態を来たらせることになるであろう——その状態とは

(記者註) 著者は次の絵でそれを暗示している。

平和と善意の人類



(カットの柵の言葉は上から——

自己中心、民族的嫉視、信教の相違、階級意識、不機嫌)

付 録

第 II 部の“健康と力”の章の体操の項で引照されている六種類の体操——“Scouting for Boys”から以下を要訳します。

健康を増進する体操

次のような 10 分程度の時間で道具もなくてできる体操を毎日規則的にすると、小さい子供でも、弱い少年でもほとんど誰でも強く健康になれる。

朝起きた時と夜ねどこに入る前に、できるだけ薄着かはだかになって、戸外か開け放した窓ぎわでやってもらいたい。

各運動の目的を知り、呼吸を鼻から吸いこんで口から吐き出すことに注意すれば、この体操の効果は一層大きくなる。素足ですると足ゆびと足を強くする。

1. 頭部と頸部のために——両手の指と手のひらを使って、頭と顔とえり首を数回強く摩擦する。えり首とのおどをおや指で押す。

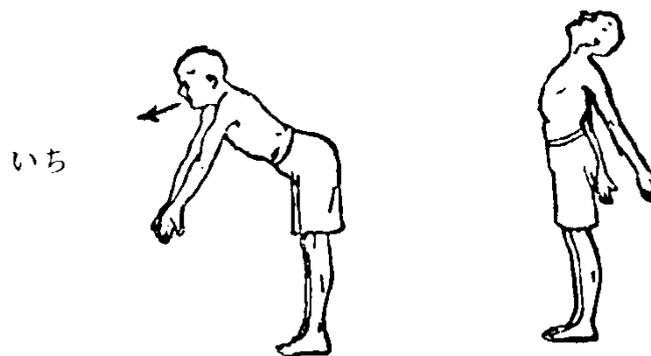
この第一の運動が終わったら、髪を梳り、歯をみがき、口と鼻のおくまで嗽いて冷水をコップに一杯のんで次の体操をつづける。各運動はできるだけゆっくりとすること。

2. 胸部のため——真すぐに立ち、上体を前方に倒しながら、手のひらを外に向けて両手をそろえて垂らし、息を吐く。

両手を徐々に頭の上を通して上げながら、上体をできるだけ後にそらして、鼻から空気を吸いこむ。次に両腕をゆっくりに両側へ下ろしながら、口から息を吐く。

終りに上体をもう一度曲げて、肺に残っている息を吐き出し、一！とかけ声をかける。この段階ごとに数をかけ声して、以上を 12 回くりかえす。

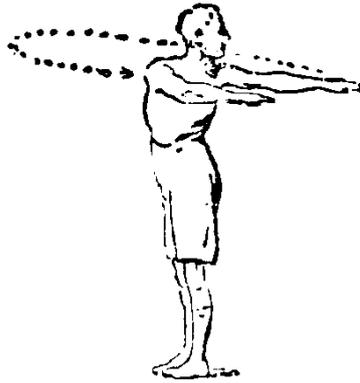
感謝



この運動は、肩、胸、心臓、呼吸器を発達させるのが目的である。

深呼吸は新鮮な空気を肺に送りこんで血液を浄化するために、また胸廓をひろげるために大切であるが、やりすぎではいけない。肋骨のまわり、特に背部の方までふくらむほどに、鼻から充分吸いこみ、ちよつと休止して、今度は最後の息まで出してしまうほど、静かにゆっくりに口から吐き出す、ちよつと休止、鼻から深く吸いこむ、という具合にする。

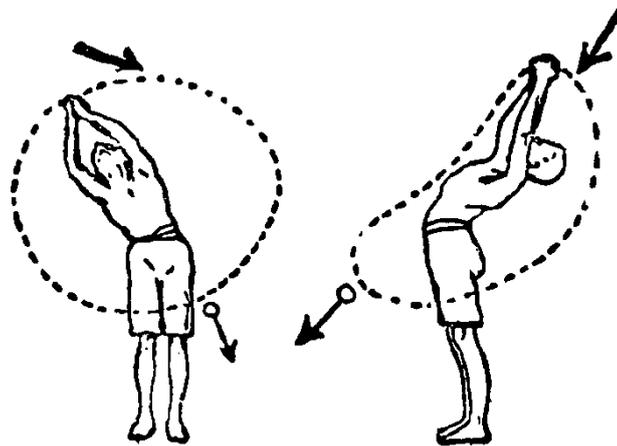
声を出して歌うことにも同じような効果がある。



3. 腹部のため——真すぐに立ち、両腕を指先まで伸ばして、肩の高さまたは肩より少し高目に前方につき出し、両足は固定したまま、ゆっくり右へ振る。その時、右腕ができるだけ後まで廻るように。それから今度は左へ同じように振る。これを12回くりかえす。

この体操は肝臓、腸、その他の内臓の働きをよくし、肋骨のまわりや腹部の筋肉を強くする。この間呼吸に注意して、右後へ振った時に鼻から吸いこみ、左後へ廻った時に口から吐き出す。その時に回数を数える。数をいうのは声に出すが、数の代りに朝の祈りのつもりで“神さま”、“お父さん”、“お母さん”、“お姉さん”、“お兄さん”、“○ちゃん”、“△君”、“×さん”、“みんなを”、“今日も”、“お守り”、“下さい”というように、家族や友人の名を入れてするとよい。

12回連続のうち6回右で息を吸いこみ左で吐くのをくりかえしたら、あとの6回は左で吸いこみ右で吐くように変える。



4. 胸部のため——“円錐状体操”——直立の姿勢をとり、両手を頭上にぐっと伸ばして両手の指を組む、そのまま後にそり、両腕を円錐状に頭の上から胸のまわりを、ぐるぐる大きくゆっくり廻すようにすると両腕を円を描いて廻すのと共に、胴体は腰のところから後に、左の方に、前に、右の方に、また後にと曲げられる。腰と腹部の筋肉の運動である。

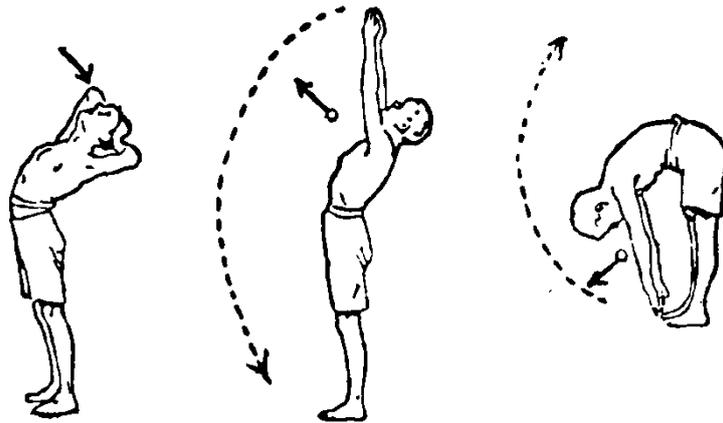
運動中、自分の背後のものを見ようと努めるようにしながら、右廻り左廻り各6回ぐらゐする。

5. 胴体下部と下肢背部のため——ただ立って、空にも届けとばかり、身体を上へ伸ばし、後へそり、前へかがみ、それから膝を伸ばしたままで手先が足の爪先につくまで深くかがむ。

両足を少し開いて立ち、両手を頭につけてできる限り仰向いて空を見上げる(下の図の左端)。そうしながら、“神さま、頭から足の先まで私のからだはあなたのものです”といひながら、神の息吹を飲むようなつもりで鼻で空気を吸いこむとよい。それから両手を高く上に伸ばし(図の中央)、回数をかけ声しながら息を吐き出し、次にゆっくり、膝を曲げないで指先が爪先につくまで前にかがむ(右端)。

それから膝と腕を共すぐにしたままで、最初の姿勢にゆっくり戻し、以上を12回くりかえす。

この運動の目的は、手の指先が爪先に届くかどうかではなく、腹部の筋肉を摩擦させるためであるから、無理に指先が爪先まで届かなくてもかまわない。身体を上へぐっと伸ばし、下に深く曲げることに値うちがあるのだから。



6. 下肢のため——素足になり、直立の姿勢をとる。両手を腰におき、爪先で立ち、両膝の間をひろげ、その膝を静かにゆっくり曲げ、かかとを持ち上げた爪先立ちのまま、しゃがむ姿勢になる。

それから静かにゆっくり膝をのばして、最初の姿勢にもどる。

これを12回くりかえす。

立ち上がりながら鼻から空気を吸いこみ、しゃがみながら吐き出す。体重は絶えず爪先にかかち、重心を保ちやすいように膝がしらを外へ開く。



O'Grady says

第II部の“健康と力”の章、教練の項に引例されている“O'Grady says”というゲームについて、ロンドンの国際事務局から次のような説明が来ましたが、これで見ると日本にも同じようなゲームがあります。

例えば“オグレディがいう、膝を曲げなさい”とか“オグレディがいう、両腕を前に伸ばしなさい”とか、リーダーがその運動をしながらいうと、みんながその運動をする。もし“オグレディがいう”をいわないで“首を右に曲げる”とかその他の運動をいってしてみせても、この場合はみんな何もしてはいけない。いろいろの運動や動作と注意深さの訓練のためのゲームで、イギリスでは誰でも知っている。

“オグレディがいう”といわれないのにうっかりリーダーの動作のまねをした人はアウトになり、こうして次々と抜けて行って最後に一人が残るまで続ける。

—— 終 ——